
錬金術士と使い魔な猫

生野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術士と使い魔な猫

【Nコード】

N3956T

【作者名】

生野

【あらすじ】

召喚魔法の副作用のせいで、すっかり召喚されてしまった由梨。共に召喚された拳句、何故か昼間は猫に変身してしまうようになった理久。

王国上層部が行った召喚魔法で異世界にトリップしながら放り捨てられた二人は、森に住む隠者に保護されて彼から魔術を学びながら暮らしている。

自分達の日常を狂わせた王国に復讐……など考えるのも面倒くさいのでそのまま森で暮らしている二人の、ヤマもオチもないちょっと

不憫で不条理な日常。たまにシリアス。
ピクシブに転載中。

錬金術士と『使い魔』の日常（前書き）

大幅改稿です。

錬金術士と『使い魔』の日常

日が傾き始めると、市場バザールの人の流れが少し変わる。経験上、これから客が入ることは無いだろう。

「そろそろ店じまいしようか？」

店番をしていた少女は傍らの猫に話しかける。見事に黒い猫だ。短毛でスマートな体つきはエボニーという猫に似ているが、一つ決定的な違いがある。瞳だ。瞳までも闇を詰め込んだかのように黒い。ともすれば魔物として狩られかねない姿だが、この猫が無害だということは誰もが知っている。猫の名前はリック。街外れの森で錬金術の工房を構える少女ユーリの使い魔として知られている。

【アトリエ・ユーリ】といえば、この国でも数少ない錬金術士の店だ。店番の少女はれっきとした店主で、異国風でどこか幼い顔つきが特徴だった。ふわふわと癖のある茶色の髪を三つ編みにまとめ、風変わりな服（ゴシックロリータだと本人は言っている）は『店に客を呼び込むためにはまず客の目を引かないと』という彼女なりの心意気なのだと言う。

残った品物と帳簿をまとめると、いつの間にか目を覚ましたリックが帳簿の上にどっかりと座り込んでいた。運べと言わんばかりのその様子を見て、ユーリが呆れたようにため息をついた。

「あのねー、リック。いくら小さくたって重さが増えることに変わりは無いんだけど」

「猫が寝てばかりなのはしょうがないじゃん」

「リユリユまでそうやって甘やかすし」

「いいじゃん。それにリックの客寄せ効果は確かでしょ？　だつたらこのくらいしてやつてもいいんじゃない、ご主人様？」

からかうような口調でリックを擁護したのは隣のスペースに店を構えるリユリユだ。リックの顔を覗き込むと、トレードマークのポニーテールがくるりと揺れた。

「それよりさ、ユーリ。うちのばあちゃんの常備薬がそろそろ心もとないんだ。頼める？」

「あれ、もう？」

リユリユの祖母は神経痛持ちでお得意様だ。季節の変わり目だからだろうか、思っていたよりも減るのが早かったらしい。ユーリが首をかしげると、リックが済ました顔で「にゃお」と鳴いた。

「わかった。そろそろできてるはずだから、明日おばあちゃんに届けるって伝えて」

「ありがと。前金代わりに好きなのひとつ持ってって」

リユリユが売るのはワインやジャムなど果物を使った食品だ。

ユーリは目を輝かせてブルーベリージャムの瓶を取る。ロシアンテューはユーリの好物の一つだ。

街からかなり離れた森の中。そこでユーリは黒猫と二人で暮らし
てゐる。一般的に考えれば女と猫だけで人気の無いところに暮らすのは危ない。しかしユーリとリックにはそれなりに事情があつて危険は少ない。

この世界には【マレビトに危害を加えたものには災いが訪れる】
という言い伝えがある。【マレビト】とは、異世界から墜ちてきた
人や動物のことだ。

そしてこれは公然の秘密なのだが

ユーリとリックは【マ

レポート】だった。

ユーリの本名は春国由梨。はるくに ゆり この世界に墜ちてくるまでは日本で高校生をやっていた。イリアナ

森の中にあるユーリ達の小屋に着くと、リックは荷物から飛び降りて奥の部屋に駆け込む。日が落ちると、リックも本来の姿に戻る。奥の部屋でこそそと音がして、出てきたのは猫じゃなく、長身の少女だった。短く大雑把に切った髪と鋭い瞳は黒。ここだけが名残だ。

冬沢理久。ふゆさわ りく 由梨と共に異世界に落とされるまでは女子高生だった、昼の間は猫に変身してしまう難儀な体質の持ち主だ。

「リック、リュリュのおばあさんの薬は？」

「薬棚の中。上から三つ目右から七つ目の引き出し。それと家の中までリック言うな」

「まあまあ、あとでロシアンティ淹れてあげるからさ」

リュリュからもらったジャムの瓶を見せると、リック……もとい理久の機嫌がさらに悪くなる。

「それは宣戦布告と受け取っていいんだな？」

理久はベリー類全般を苦手としている。……由梨はそれすっかり忘れていたらしかった。

私が猫になったわけ（side 理久）（前書き）

使い魔（だと思われている）リックこと理久は、非常に理屈っぽい
です。

私が猫になったわけ（side 理久）

「すみません。あなた方が召喚されたのは手違いです」

床に魔法陣が描かれた部屋で、宮廷魔術師を名乗る男はそう言い放った。

「……小寒？」

微妙な変換ミスをした由梨に訂正しようとして

「にゃあ」

しかし自分の口から出たのは猫の声。おかしいなと思うより先に、私は由梨に持ち上げられた。慌てて辺りを見回すと、由梨の傍らには私の高校の制服。……え？

「かつわいい！ このにゃんこ、あなたのですか？」

待て由梨。その前に現状を把握しろ。さっきまで隣りでバスを待っていた私がないことを疑問に思え！……と、抗議したくても口から出るのは猫の声。いくら由梨が無類の猫好きだからって、これはあんまりだ。薄情者め。

「あなたと共に召喚されたなら、あなたのものでは？」

「あたしじゃないです。さっきまでこの子はいなかったし……って、理久！ 理久がいない！」

「にゃー！ なお、ふぎゃー！ （気づくのが遅い！）」

大声で抗議しつつ、わずかに残った自制心を総動員させて引っこ抜くだけは我慢する。猫に引っこ抜かれるとかなり厳しい。ああ、体験談だとも。うっかり猫の尻尾を踏みつけてしまったことがある。あの時は地獄を見た。猫に引っこ抜かれ、由梨の説教を喰らい……やめよう、気分が暗くなる。

「え、じゃあキミは理久なの？」

「みぎや。（そーだよ。）」

私達の様子を見て宮廷魔術師はため息をつき、私の背中をなぞって何事か呪文を呟いた。やめろゾワゾワする！私は首から下を触られるのが大嫌いなんだ！

「やめんか、気持ち悪……あれ？」

「このままでは話が進みそうに無いので、猫殿に言語化の魔法を掛けさせていただきました」

うわ、実にファンタジー。喋る黒猫なんて、掃除機に乗った魔女が出てくるドラマにしかないと思っていた。

「えーっと……理久？」

「なんだ、由梨」

「……やっぱり理久なんだね。……見た目は可愛いのに」

「顔に引つ掻き傷をつけてもいいんだな？」

前足の爪を見せ付けるようにして、警告。今の私は非常に機嫌が悪い！私の本気オーラを察したのか、宮廷魔術師は由梨の手から私をつまみ上げた。ええい、首筋をつかむな！

「とにかく、この猫殿……リック殿でしたか。ユーリ殿にゆかりの猫ということでしょうか？」

「私は人間。あとリックじゃなくて理久！」

「理久はいとこです。それにあたしはユーリじゃなくって由梨ですよ」

「ええ、ですからリック殿にユーリ殿でしょう？」

宮廷魔術師に抱きなおされたので、注意深く口の動きを観察してみる。すると、どう見ても口の動きと出てくる言葉が一致しない。おそらく魔法だか神秘だかで自動的に通訳されて聞こえるんだろう。そして、この世界で『ユーリ』『リック』という名前は一般的らしい。そのせいで宮廷魔術師は私達の名前を勝手に誤解した。こんなところか。

「名前については置いておくとして……手違いとは？それと私が猫になったことに何か関係があるの？」

あ、宮廷魔術師の顔が引きつった。あまり言いたくないらしい。けれど言いたくないで済ませるものか。私たちには現状を把握する権利がある。

宮廷魔術師の話をまとめると、こんな感じだ。

この世界では、光を司る兄神と闇を支配する弟神が終わりのない戦いを続けているらしい。闇を司る弟神は世界の外側に住んでいて、この世界に点在する時空の裂け目から魔物を送り込んでいる。光を司る兄神は人々に武器や魔法を与えて迎え撃つ。この戦いは光と闇の均衡を保つ為に必要とされている。

闇の神の手口が、近所付き合いがうまくいってない根暗な人みたいだと思う。言わないけど。

兄神が人に与えた魔法の中に、召喚魔法がある。時空に穴を開けて、自らの力になるモノを呼び出すものだ。だが、人がこの術を使うと反動がある。無理矢理開けられた穴を塞ごうとして空間が揺らぎ、あらぬところに穴が開いてしまうのだ。穴の向こうから何かが落ちてくるのが、たまにあるらしい。

そして、私たちがここに落ちてくる3日ほど前、この国で救世主召喚の儀式が行われた。

ここまで話せば察してくれる人がほとんどだろう。

私たちは、運悪く時空の裂け目から墜落してこの世界に
来たようだ。

「で、理久が猫になっちゃったのは……」

「先だつて召喚された祈りの神子様は美しい白猫をつれておられました。ですから、人ひとりと猫一匹分の穴が開いたのでしょうか。そして、時空の穴を通る際に……」

「何の間違いか私の体が勝手に猫に変換された、と？」

「祈りの神様はユーリ殿と似た体格でしたからね。ユーリ殿は何の問題もなかったのでしょうか」

となると、祈りの神子とやはらずいぶん小柄ということか。由梨は150センチも無い。そして私は170を少しばかり越えている。「猫の体積分、身体が切り取られたりしなくて良かったですねえ」「言いたいことはそれだけか、この他力本願！」

あまりの言い草に、さすがに堪忍袋の緒が切れた。宮廷魔術師を引つ掻いてやろうとする私と由梨がどうにか止める。それからしばらく不毛な追いかっこが続き、さらにこの国の王に謁見したときに似たようなことを言われ……キレた私が王の顔に傷を創ったとして誰が責められようか。むしろその程度で勘弁してやったんだから感謝して欲しい。

王の顔に傷を創った為牢獄に入れられた私たちを宮廷魔術師は哀れんだ。儀式の責任者としての良心の呵責みたいなものもあったんだろう。彼は私を脱獄させ、自分の師匠が隠棲する森へと逃げ延びさせた。聞けばその師匠も私たちとおなじ身の上だとかで、私たちは師匠の保護下で魔術や錬金術を学ぶことになる。

登場人物紹介（随時加筆）

春国 由梨（ユーリ）

「せっかくかわいい姿になったのに、中身はそのまんまなんだね。」

職業：錬金術士兼売り子

年齢：15（召喚当時）

瞳：濃いブラウン。どんぐりまなこなので幼く見られがち。

髪：明るいブラウンでロングの三つ編み。天然パーマで、ふわふわしている（少々コンプレックス）

体格：かなり小柄。ロリータファッションがよく似合う。

趣味：シヨッピング、裁縫、理久で着せ替え

特技：第六感が発達している

好き：猫、フルーツ、紅茶、恋バナ

嫌い：タマネギ、キノコ、怪談、理久の屁理屈

宝物：祖母の形見のお守り

武器：フライパン

日本から異世界に墜落した不遇な少女一号。理久は従姉妹で、姉妹同然にして育てられた。手先が器用。魔力は高いが制御に難ありの『火事場の馬鹿力』タイプ。勉強以外ならなんでも器用にこなせる。

由梨と理久が着ている服は全て由梨の手作り。日本にいた頃から服に頓着しない理久を着せ替え人形にするのが趣味だった。現在はミシンがないのでちょっと欲求不満気味らしい。

母方がラテン系の血を引くクォーター。色素が薄いのはそのせい。

冬沢 理久（リック）

「家の中までリック言うな。」

職業：錬金術士兼使い魔（かなり不本意）

年齢：15（召喚当時）

瞳：黒。細いというか、鋭い。

髪：黒の、ショートヘア。

体格：長身痩躯。目付きと身長のせいか男に間違えられることもある。猫形態時はエボニーに似ている。

趣味：読書、漬物作り、薬の調合、素材の採取

特技：記憶力がいい、ヤクザキック、スリングショット

好き：本、植物、白米、野菜、魚料理

嫌い：ベリー類、首から下を触られること

宝物：琥珀のタイプン

武器：仕掛けつきの手甲（スリングショットを装備）

不遇な少女二号。日中は黒猫に変身してしまうため、周囲からは由梨の使い魔だと思われる。理論の構築に長ける一方で魔力はミジンコ以下。針を持たせれば必ず怪我をするタイプ。運動は基本的に苦手だが、水泳とケンカ技ならそこそそ得意。

兄たちから弟のように扱われてきたために女としての自覚に欠ける面がある。

由梨と同じくクォーターだが、顔立ちは日本人そのもの。その血筋はむしろ手足の長さに現れている。

アーロン・シュタインベック・エーベルハルト

「そつちはわたくしの責任じゃないような……」

年齢：35（召喚魔法実行当時）

職業：宮廷魔術師

瞳：ヘーゼル

髪：亜麻色。魔術師は総じて髪が長い。

体格：痩せている。男性としては小柄。

趣味：研究

特技：早口言葉

好き：研究、魔法書、歴史、ハーブを練りこんだパン

嫌い：ネズミ、運動、酒、猫形態時の理久

宝物：王から下賜された宝剣

武器：水晶をはめこんだ杖

由梨と理久が異世界に墜ちてきた直接の原因。かなりの学者馬鹿で、二人を研究対象とみなしている節がある。彼なりに二人の境遇に責任を感じており、時折差し入れを持って訪問する。

貴族の次男でエリート、しかも美形なのに基本的に不憫。魔術師は基本的に結婚しないので、たぶん生涯独身。

リユリユ・シェンク

「おっはよー、ユーリ。ねえねえ聞いた？」

年齢：由梨達の2歳下

職業：市場の売り子

瞳：明るい緑

髪：茶色がかった金色でポニーテールにしている

体格：年齢相応の身長、そこそこスリム
趣味：ユーリとおしゃべり

特技：セールストーク

好き：祖母特製のジャム、祭、ジュース

嫌い：酔っ払い、辛い物

宝物：初恋の人にもらった綺麗な小石

市場の売り子でワイン職人の娘。家で作ったジャムやワインを売っている。由梨たちの師が祖父と親しかった。家族のためにセールストークに磨きをかける孝行娘。わりとミーハー！。

商売柄、富豪や貴族にもそれなりのパイプを持っており、由梨たちに仕事を紹介することもある。

『師匠』あるいは『じいさま』

「若人の探究心を摘むなど、隠者としてあるまじき行為じゃからな。」

年齢：300は越えているらしい

職業：錬金術士兼あやしい爺（本人談）

瞳：くすんだ青

髪：ずいぶん昔に全部無くした（本人談）

体格：160前後、ローブを着ているので体つきは判別不可

趣味：馬鹿弟子いじり

特技：神出鬼没

好き：酒

嫌い：権力者ども

宝物：馬鹿弟子たち

かつて勇者として召喚された異世界人。権力争いに巻き込まれ暗殺されかけたので、報復をきっちりした上でアーロンの実家の領地にある森に隠遁した。言動はきついが弟子思い……らしい。呪術的な理由で本名を隠している。

放任主義を自称しているが、弟子達からは『弟子が右往左往しているのを見ただけではないか』と勘ぐられている。

サラ・トラウモント・マイヤー

「わたくしに錬金術を教えてくださいませんか？　弟子にして欲しいんですの！」

年齢：リユリユと同じくらい

職業：貴族のお嬢様

瞳：深い青

髪：鮮やかな赤毛で、おろすと腰まである

体格：小柄で華奢

趣味：買い物、珍しいものの探し、猫がモチーフのものをコレクション

特技：お目付け役を撒くこと

好き：めずらしいもの、おいしいもの、猫

嫌い：貴族間の噂話

宝物：使い魔リックがモデルのぬいぐるみ

中流貴族トラウモント家の末娘。行動力だけなら誰にも負けない暴走系お嬢様。基本的に世間知らずの為、当然由梨たちの事情や秘密も知らない。

バカンス先で見た錬金術に魅了され、台風娘は今日も元気に爆走

する。

登場人物紹介（随時加筆？）（後書き）

思いつきで加筆しますが、登場人物自体はめったに増えないかと。

あたしと『異世界』（side 由梨）（前書き）

時系列ばらばらでごめんなさい。

あたしと『異世界』（side 由梨）

そういえば言い忘れてたけど、宮廷魔術師さんの名前はアーロンさん。あたしは某海賊漫画を思い出したけど、理久は『モーセの兄弟と同じ名前だ』って言った。『モーセって、海を割る人だっけ？』って聞いてみたら、『海賊漫画でアーロンっているのか？』と聞き返された。

「海賊といえば麦わら帽子かハリウッド映画でしょ」

「海賊といえばピッピにフック船長に大航海時代の英雄だろ」

「……そーだね。理久って妙に常識に欠けてるもんね」

「モーセが海を割った人間としか思っていない由梨に常識知らずといわれてもな」

だめだ。いつものことだけど、あたしの常識と理久の常識は違いすぎる。

そのアーロンさんだけど、あたしたちを自分のお師匠様に預けてからもしょっちゅう連絡をくれる。この間手紙がきて、今日あたり顔を出してくれるらしい。アーロンさんが来る日はちょっとだけ夕飯を豪華にする。やっぱりお客様はちゃんとおもてなししないといけないしね。理久は未だにアーロンさんのことが好きじゃないみたいで、この日だけは夕食が豪華になるのが納得いかないみたい。

今日のメインはポテトグラタン。そうだ。グラタンといえば、この家のオープンを初めて見た時はびっくりしたっけ。見た目は石窯オープンなんだけど、薪がいらないの。

錬金術では火は大切な物で、工房にある大きな釜の下にはいつも炎がある。その炎をオープンに流し込めるように仕掛けを作っ

るんだって。仕掛けを動かすにはそれなりの魔力が必要で、魔力が
少ない理久は動かせない。どこへ行っても要領が悪いのは理久らし
いといふかなんというか。

オーブンだけじゃなくて、この家の道具はほとんどが魔力で動か
す物だから、家事はあたしの担当になった。

ま、昼間は猫になっちゃうだけでも家事の戦力にはできないんだ
けどね。

「お、いいにおいだな」

「あ、じいさま！今日はグラタンにしますね」

「おお、ご馳走じゃの。馬鹿弟子も喜ぶじゃろう」

じいさまがひょっこり顔を出した。じいさまはあたしたちの保護
者兼先生でアーロンさんの師匠で、実はここじゃない世界から来た
『元勇者様』らしい。役目を果たしたあと、権力争いに巻き込まれ
かけたから暴れるだけ暴れて逃げ出したんだって。

理久といいじいさまといい、異世界から来た人の扱い悪くない？
ヒトゴトだけど『祈りの神子』って人と猫が心配。いじめられて
なければいいけど。

あたしと『異世界』（side 由梨）（後書き）

この世界の錬金術は【初期のア リエシリーズ＋現代科学＋民間療
法レベルの薬学】みたいなトンデモ錬金術です。

残酷な報告

日暮れと共に人間の姿に戻る理久は、夕方になると自室に戻る。服を着たままで変身できればいいのだが、そうはいかないらしい。着替えを済ませて居間に戻ると　　アーロンが土下座をしていた。フードからやわらかな亜麻色がこぼれ落ちて、コーヒ―色の木の床との不思議なコントラストが印象的だ。理久はなんとなくそんな場違いな感慨を抱いた。

「で、いきなり何事だアーロン学者馬鹿」

「本当に申し訳ない　　ユーリ殿、リック殿。陛下はあなたを『存在しないものとする』と宣言なさいました」

虚ろな響きの言葉。その意味をはかりかねて、由梨と理久は顔を見合わせた。

「えっと……それって何かまずいんですか？」

「狭量なジジイひとりにシカトされたところで何があるんだ？」

心配そうな由梨の言葉と突き放すような理久の言葉はどこまでも対照的だ。由梨がグラタンを取り分けるのを見つつ、アーロンは言葉を選ぶように黙り込んだ。食器が触れ合おう音が響き、しばらくすると『師匠』が口を開いた。

「つまり、あの若造はこう言いたいじゃろ。おぬしたちはこの世界に来て『いない』とな。この国には建前マレイトじゃが異世界人に対する保障があることになっておる。それを請求することはできなくなつた。　　そうじゃな、馬鹿弟子？」

「……そう、です。陛下は確かにそうおっしゃいました。」

「やっぱり、わからないんだけど……。」

説明してくれと言いたげな由梨の隣で、理久は仏頂面でグラタンを口に運び咀嚼する。その目には一切の感情がない。水でグラタンを流し込み、低くうなった。

「一つ聞く。その請求できる権利の中に『元の世界に帰せと主張する権利』が……あるんだな？」

問いかけの形をとってはいるが、明らかに断定であり確認だ。強く握りこんだゴブレットが不快な音を立てた。アーロンは口を開かなかったが、それが何よりの答えだと誰もがわかった。机を一度乱暴に叩き、理久は席を立った。

「ごちそうさま。 師匠、今日は満月でしたよね。月の欠片を取ってきます。夜明けには、戻ります」

理久は足早に居間を出た。ややあつて、草を踏み分ける音が聞こえてきた。

「あ……理久！ ……ごめんなさいじいさま、アーロンさん。あたし……」

「おう、行ってこい。ついでじゃ、満月のしずくも補充しておいとくれ。それと夜食を持って行ってやれ。馬鹿弟子、おぬしはワシの酒の相手じゃ」

『月の欠片』とは、満月の夜に湖などで発生する結晶だ。薬の材料にもなるし、アクセサリの材料としても取引される素材だ。水の中で生まれて水底へと沈み、夜明けと共に水に溶けてしまう。そのため、満月の夜に湖に潜って採るしかない。大概の運動が苦手な理久だが、唯一水泳だけは人並みにできた。

（頭を冷やすにはちょうどいいか……）

息継ぎのために一度水から顔を出し、理久はそんなことを思う。黒髪を頬に貼り付かせた自分の姿が水面に映る。まるで湖に巣食う魔物のようだ。黒い髪に黒い瞳。闇に直結する色を持つ生物は魔術師や錬金術士の使い魔か……魔物のどちらかだ。そのため、理久は昼間は由梨の使い魔ということにしている。大地の髪と瞳を持つ由梨はこの世界になじむことも不可能ではない。だが理久は『異世界人の理久』ではなく『使い魔リツク』でなければいけない。黒髪黒眼の人間は粛清されるべき存在なのだ。

再び潜ろうとしたそのとき、草を踏み分ける音がした。湖のそばまで歩いてきた由梨は、水から出る気配の無い理久に声をかける。

「理久、夜食持ってきたよ」

「そのへんに置いてけ。今夜は欠片が大量発生だから、採れるだけ採りたい。で、戻っとけ」

「ん。でもあたしも採取だから。じいさまから頼まれたの」

「わかった。とりあえず今取れた分だけ置いとく」

水辺に『月の欠片』をまとめて置くと、小さな音を立てて理久の姿が消えた。

いつも攻撃的な言動だが、理久は不機嫌になったり怒ったりする

ことはめったにない。大概のことは諦めるか妥協する。だが本当に怒りを感じたときは　　こうして一人になりたがる。だから由梨はこれ以上言いつのすることもなく採取を始めた。

しばらくして、理久が湖からあがった。小休止らしい。由梨が持ってきたサンドイッチを一口かじる。口の中のパンを咀嚼し、飲み込む。

「……米が食べたい」

「へ？」

夜露をガラス瓶に移していた由梨の手が止まる。今、この相棒はなんと言った？

「だから白米。あと味噌汁、たくあん、塩鮭！　ああもう、なんでこの国は西洋文化なんだよ！」

「ちょ、理久？　いきなり何を……」

「由梨は思わないのか？　味噌と醤油がない世界なんて、ここに墜ちてくるまで想像すらしてなかったんだってのに」

「思っけどさあ！」

「あー、思い出したら腹が立ってきた！　あんの成金趣味ハゲ親父！　……もうひと泳ぎしてくる！」

大きく水しぶきを立てて、再び理久は水の中へと消えた。

「えーと……まあいつか。立ち直ったみたいだし」

理久が本当に腹を立てているのは食事のことではない。郷愁のようなものはあるだろうが。憎まれ口は挨拶のようなものだ。つまり

それなりに落しどころは見つけたのだろう、たぶん。

そう結論付けて安心したはずだが、後日、理久が『師匠』に頼んで粉屋から小麦のふすまを大量に持ち帰ったと聞いた。

「ちよつ、たくあんのこと本気だったの？」

「あたりまえだろ。あ、師匠！ 唐辛子すこしいいただきます」

「おう、好きにせい。うまく出来たらワシにも食わせろ」

理久があの日怒ったのは、故郷に残した家族のことや自分の存在についてのはずだ。断じて食のためではない。……そのはずなのだが。

『心配して損した』と、かなり本気で思ったのは仕方ないことだろう。

残酷な報告（後書き）

ふすまを使ってぬか床っぽいものを作るのは本当にできるらしいです。

『錬金術士』の舞台裏（前書き）

あるいは『理久のお仕事編』

『錬金術士』の舞台裏

『総括すると、マレビトも魔物も究極的には同じものだ。異質の力を以て不可思議を被う。そしてマレビトの異質さは力だけにとどまらない。彼のものたちは』

炎の揺らめきが不安定になる。どうやら随分長い時間が経ったらしい。由梨はグイッと大きく伸びをしてから立ち上がった。理久から読んでおけと渡された歴史書（和訳済み）を読んでいたら、思ったより没頭してしまっただけらしい。窓から空を見れば、月が西に傾いていた。

「そろそろ寝よ。美容に悪いし」

理久は徹夜で　　というか、体質の関係から夜型になってしまった　　調査すると言っていた。大掛かりな調査なら由梨と共にやる必要があるが、今回は複雑ではあるもののあまり魔力は必要ないはずだ。

「おやすみー。」

誰に言うでもなく呟いてベッドにもぐりこんだ。

理久が持つ魔力は見習い以下、もっと言えば一般人としても低いレベルだ。そのため、調合の時には外付けの魔力が必要になる。理久はこれを冗談混じりに『電池』と呼んでいる。勿論、由梨にしか通じていない。ちなみに魔力が切れても充填可能で、充填は由梨がやっている。

「げ、電池がもう切れそう。由梨に充電たのまないと」
さて、その『電池』だがまさか本当に電池の姿をしているわけではない。理久の場合は両腕に四つずつのバングルとタイピンと眼鏡、それにグラスチェーンだ。普通、魔力を充填させるアイテムとしては指輪やピアスが一般的だが『指輪は作業の邪魔。ピアスは穴を開けたくない』と理久がわがままを言った結果だ。形状も魔力の流れ方に関わる為、調査をするときの理久は呆れるほどの重装備だ。

「うつし、電池装着完了。さーてと」

バングルを全てはめて、ようやく準備完了だ。材料はそろっている。魔力も外付けながら、ある。あとは理論を使って調査すればいい。ナイフで指に傷をつけ、流れる血で古代語を書き連ねる。素材から取り出すべき特性、望む変容、精霊への請願、代償……そういったものを羊皮紙に書き込んでいけば調査に必要な魔法陣のでき上がりだ。

錬金術の釜から液体を取り出し魔法陣をなぞると血で書かれた紋様が淡く輝きだす。

「告げる。我は理を知る者、真理の僕。森羅万象を司る精霊よ、我が声に応え来たれ」

呪文を唱えだすと『電池』が小さく振動を始めた。呪文に反応して魔力が魔法陣に流れ込む。血で魔法陣を書いたのは、自分自身を魔法陣の一部として魔力の流れを促す為だ。

術者は魔力の流れを制御する。理久は制御こそ優秀だが、魔力

に問題が多い。由梨は魔力は高いものの活かしきれていない。だからこうして分業して調査を行う。『錬金術士のユーリ』の舞台裏だ。

呪文で魔力の流れを操り、材料同士の反発をねじ伏せる。チリチリと肌が焼け付くような錯覚。それが治まれば調査は終わりだ。最後に羊皮紙を焼き捨てる。血で魔法陣を書いたとばれると由梨がうるさい。証拠を残さなければいくらでも言い逃れできる。

「はい終了つと。あー眠い」

長い時間集中すると、疲れは一気に襲ってくる。ひとつ欠伸が口から漏れて

意識が途切れた。

空が明るくなり始めたのを感じて目が覚めた。隣のベッドに寝ているはずの相棒^{つかいま}はまだ工房から戻っていないようだ。夜が明けると猫になる体質なので、夜が明ける前にはベッドに戻るのが常のはずなのだが。

「そこまで時間がかかる調査じゃなかったはずだけどなあ……？」
ベッドから降りてガウンを羽織り、工房へと向かう。調査には独特のにおいがつき物なので、工房と寝室は建物からして別になっている。あくび交じりに工房の扉を開けた。

「理久ー、だいじょー……あ。」

工房には誰もいなかった。床には服と魔力をこめた『電池^{アクセサリ}』が散乱している。服の胸に当たる部分がこんもりと膨らんでおり、探してみると黒猫がすやすやと眠っていた。どうやら調査を終えてそのまま電池が切れたように眠ってしまったらしい。

「お疲れ様」

起こさないように黒猫^{あいはう}をそっと抱き上げる。さあ、一日の始まりだ。

『錬金術士』の舞台裏（後書き）

そろそろ由梨を活躍させたいので、次回はたぶん由梨がメインです。
一応、由梨が主人公のつもりです。

かくして流行は生まれた（前書き）

予告どおり『由梨のお仕事』編です。由梨は魔力だけならチートな子です。

かくして流行は生まれた

傷薬に毒消し、魔力を宿した容器や守護のまじないを施した護符やナイフ、何故か漬物。【アトリエ・ユーリ】の品揃えは豊富を通り越して雑多と言える。

都からは遠く離れているものの、この都市はリゾート地として栄えている。そのため客層は地元民は当然のこと貴族や商人、さらに彼らの護衛として雇われた傭兵など幅広い。いきおいニーズも多岐に渡り、お人好しの由梨はそれらすべてに応えようとしてなんともこった煮状態の品揃えとなったわけだ。

「そっぴや、どつかのおえらいさんの姫が来てるらしいな」

市場へ行く道すがら、理久は早足で由梨を追いつながらそんなことを言った。

「いつ仕入れたの、そんな話」

「昨日、由梨が肉屋のおかみさんにつかまってるとき。道の向かいでパン屋のおかみさんと蹄鉄屋の隠居した婆さんが井戸端会議してた」

「それなら確かだね。あのおばあさん、謎の情報網持ってるから」

近いうち、市場にお忍びで姫やその従者が来ることも視野に入れておいたほうがいいかもしれない。そうなるとアクセサリを新しく作るのかな、などと由梨は思いをめぐらせた。

情報が少し遅かったか、と感じたのは市場についてからだった。

店に商品を広げて理久が看板のそばに寝そべると、リュリュが目を輝かせて話しかけてきたのだ。

「ねえねえ知ってる？今、どつかのお姫様がお忍びでバカンスに来ててね、そのお姫様、買ひ物が趣味なんだって！市場にも来るかもね。うちのワイン買っていつてくれないかな」

「おはよ、リユリユ。リユリユんちのワインはご領主さまの家にもおさめてるし、ありうるんじゃない？」

「きゃー、どうしょ！ お姫様ってどんな人かな」

「……なーう」

理久は退屈そうに一つ鳴き、尻尾をぱたりとゆらした。興味ない、どうでもいい……そんな雰囲気をもとわせて。

「本当に来るし。」

めったなこととは言うものではない。そんな後悔に襲われる。今、店の前で由梨特製のアクセサリーを真剣な目で見比べているのはどう見ても平民ではない女性だった。服こそ典型的な町娘のそれだが、まとうオーラが違う。そしてなにより、手がやたらと細くて白いのだ。町娘であろうはずもない！

「うーん、迷ってしまいますわ。ねえブリギット、どれが似合うかしら？」

「お嬢様に似合わないものなどありません」

そしてどうやらお忍びなのは見た目だけ。正体を隠す気はあんまりないらしい。隣に立つ町娘風の女性はメイドらしい。『お嬢様』に応えながらも目は由梨をけん制していた。『お嬢様に無礼を働くようならただではおかない』と。

「え、えーつと……」

この微妙な空気をどうにかしようと辺りを見回すが、あるのは商品と理久だけだ。そして理久は使い魔の猫でしかないのでこの状況を打破するには向かない。もちろん理久が助け舟を出せないことは無いはずだが、関わりたくないらしく寝たふりを決め込んでいる。

（こ、この裏切り者ー！）

非難の視線を向けるも、理久は『接客は由梨担当』とばかりにあ

くびで一蹴した。

それが失敗だった。令嬢の興味がアクセサリから理久に移ったのだ。

「あら。この猫ちゃん、置物じゃなかったのね」

「へ？ ああはい。この子はリックって言ってあたしの使い魔です。リック、ほら起きて挨拶」

「んなう……」

小さな額を人差し指で小突かれ、しぶしぶながらに瞳を開ける。あくびと共に伸びをすると、令嬢の目が輝いた。なんだか嫌な予感がする。再び寝たフリを決め込もうとするが、令嬢はかまわずに理久を抱き上げてしまった。

「まあ可愛い！ わたくし、猫が大好きなの！」

「ふぎやつ！」

「店主さん、この子くださいな。おいくらかしら？」

「え、えええ？」

「お、お嬢様！ いけません、使い魔は主から離れたらただの魔物です！」

慌てたのは理久だけではない。由梨もメイドも慌てている。使い魔の定義は『契約に縛られて魔術師に隷属を誓った魔物』だ。真相はどうあれ、それが今の理久の身分である。令嬢の腕の中でもがくが、万が一令嬢に傷をつけようものならどうなるか判ったものではない。

「大丈夫よ、ブリギット。こんなに賢い猫だもの。きつと私、仲良

くなれるわ」

「そういう問題ではありません……！」

「じゃあ、店主さん。あなたのことも買っちゃいますわ」

「無駄遣いするなと旦那様に言われたばかりではないですか！」

「ちよ、この国って人身売買って認められてましたっけ？」

当然だが、表向きは認められていない。例えば娼館などはあるのだが、建前は自由業だ。おそらく令嬢としては由梨を雇いたいといっているつもりのはずである。

錬金術士は希少だ。魔術師の一種だが、基本的に野に下って人々の為に生きる。同じく錬金術を使いながら王家や貴族に使えるものもいるが、彼らは『錬金術師』と呼ばれて区別される。そして由梨は由梨なりに錬金術士であることを誇りに思っているため……受けるわけにはいかないのだ。

「理久、ちよっとごめんこっち来て！」

慌てて『理久』と呼んでしまったが、誰も気づいていないようだ。とつさに令嬢から理久をさらい、額から毛を何本か抜く。抗議の悲鳴が聞こえたが、今はかまっていられない。

「理久、このハンカチにインクで足跡つけて」

「にゃ？」

訝しげに声を上げつつそれでも指示に従った。アドリブとフォロ―は由梨の十八番だ。きつと何か策が浮かんだのだろう。インク壺に手（意地でも前足とは言わない）をつっこみ、売り物のハンカチにくっきりと肉球スタンプを捺す。由梨はその上に切った毛を置き、さらに羽ペンでなにやら書き付け、ハンカチを両手で包んだ。

『

！』

言葉にならない言葉でハンカチに魔力を流し込む。手の中に光が生まれ……収まるのを見計らって両手を開く。

ハンカチは手のひらサイズの黒猫のぬいぐるみに変化していた。

「え、えーっと……リックは売り物じゃないので……代わりにこちらでいかがでしょう。厄除けのまじないもこめました」

「……にや」

うまく丸め込まれてくれよと祈りつつ、ぬいぐるみを令嬢に差し出す
と、あっというまにぬいぐるみは令嬢にさらわれた。

「素敵！ 錬金術をこの目で見るのは初めてですわ！ ブリギット、お代を支払ってちょうだいな」

「……かしこまりました、お嬢様」

安堵が呆れたのか、とにかくメイドはため息をつきつつ金貨を一枚取り出した。どうやら迷惑料込みらしい。釣りはいらないとばかりに令嬢の後を追って別の店へと歩いていった。

帰り道。気疲れでぐったりとした理久は荷物の中から首だけ出していた。

「あー……疲れた」

「ホントにねー。テンション高い人だったね」

苦笑するしかないとはこのことだろう。どうにか事なきを得たし、あのぬいぐるみで気をよくしたお嬢様は他の店でも色々買い込んだらしい。今日一日でどれだけ多くの商人の懐が潤ったことだろう。

「ところで、随分ハデな術使ったみたいだけど、どんな魔法陣書いたんだ？」

「魔法陣……書いた、かな？ とつさのことだから覚えてないや」
「……は？」

何せ、あの時は現状を打破することしか考えていなかった。極限

状態での対処だけに、記憶があやふやなのだと笑った。

「そもそも肉球スタンプ付きのハンカチでお茶を濁すつもりだったし。ただ『理久の身代わりを作る』ってことしか考えていなかったからさ」

「……それがどうしてぬいぐるみになるんだ。あいかわらずデタラメな術ばかり使ってからに」

呆れたような疲れたような声が理久の思い全てを物語っていた。

余談だが。

令嬢が王都に持ち帰ったぬいぐるみは、王都で爆発的な人気となった。

そして数カ月後、『王都ではやっているから』とアーロンが黒猫のぬいぐるみを手土産に持って帰って、理久から盛大な八つ当たりを喰らった。

かくして流行は生まれた（後書き）

由梨の錬金術はイメージ先行、理久の錬金術は理論先行。どこまでも対照的な二人です。

恋愛話は似合わない（前編）（前書き）

ちよつと毛色の違う話をひとつ。場面転換の都合上、前後編に分けます。

恋愛話は似合わない（前編）

由梨も理久も自分達を召喚した国王を恨んでいる。無責任に放り捨てるなんて最低だというのは由梨で、勇者召喚自体がふざけた見だと理久は吐き捨てる。そんな二人に責任を感じているのは当の国王ではなく、宮廷魔術師のアーロンだ。彼は秘密裏に処刑されそうになった二人を自分の実家の領地に逃がし、『師匠』の家を紹介した。そして、『師匠』に二人を預けるときにこう言い出したのだ。

「師匠。わたくしの未来の伴侶をお願いします。」

この言葉を聞いた瞬間、由梨は顔を真っ赤にして自分と理久を見比べた。そして理久は『由梨を嫁にしたければ、殴り合いで私に勝つてからにしがれ！』とアーロンに後ろ蹴りを喰らわせたのだった。

急に寒気がして身震いした。

「あつ。」

そのせいで手元が狂い、魔力を流し込み過ぎた魔法陣からは不吉な煙が流れ出す。あわてて魔力を抑え込んで事なきを得たが、何とも言えない寒気はそのままだ。

「どうした、アーロン」

「風邪ですか……っ！」

突然くしゃみが出る。同僚は心配そうに口元をゆがめるが、目にはからかうような色を漂わせていた。

「おいおい、噂でもされてるんじゃないか。お前に限って女絡みじやなさそうだが。」

「……内容はともかく、私の噂をする女性に心当たりはありますが……確実にけなされている気がします」

「やっぱ女だろ。お前にもようやく春がきたか！」

同僚はにんまりと笑みを深くしてアーロンの肩にかけた。いやな予感がする。

「い、いえ、風邪だと思いますので今日ははやめに……」

「風邪なんて酒飲めば一発だ！　そういうわけで、今日は飲むぜ！」
同僚の陽気な声に逃げ道が無いことを悟る。この男はやたらと要領がいい。逃げようとしても捕まるだろう。

（苦手なんですけどねえ、酒精は）

そして夜。宣言通り城下の酒場に連行されたあげく、『吐け』と迫られていた。勿論、アーロンの噂をしそうな女についてである。

「この朴念仁相手じゃ、相手のお嬢さんも苦労してんだろうさ。愚痴のひとつもこぼして当然だな」

「いや、恋仲というわけでは……」

「照れんなって。で、どこの姫さんだ。それとも実家の領地の町娘か何かか？」

アーロンの否定など聞いちゃいない。どう説明したものか考え込み……下手な言い訳では無意味だと結論づける。

「『捨て子』ですよ。私は責任がある」

「……マジかよ」

捨て子、は言葉通りの意味ではない。由梨と理久を表す隠語だ。表向き存在しないことになってはいるが、二人は国の監視下にある。

怨まれる理由が充分なだけに何かしでかす可能性があると言っのがその理由だ。

「責任つたって、ありゃあんたが悪いんじゃないだろ。第一どうやって責任とるんだよ。嫁さんにでもするつもりか？」

「彼女がそれを許してくれるのなら。傷物にした責任は どの形であれ取るつもりです。」

ゴブレットの中のワインに映る瞳は真剣そのものだ。どうやらからかっていい類の話じゃないらしい。

恋愛話は似合わない（前編）（後書き）

この話に恋愛タグは付いていませんし、これからも付ける予定はありません。

恋愛話は似合わない（後編）（前書き）

同僚氏の名前は決めてません。性格はギャルゲーにおける主人公の悪友と考えてくださればだいたいあつてます。

なお、今回の話には微妙に教育上よろしくないシーンが含まれています。

恋愛話は似合わない（後編）

「『捨て子』は確か茶髪のちっちゃい子だったよな？ お前、幼女趣味だったのか？」

「ユーリ殿は十五だそうですよ。それに、私が責任を取らなければならぬのはむしろリック殿のことです。」

場所を変えて、同僚の下宿。ワインが継ぎ足されそうになるのを必死で逃げ回る。

「リック……って猫の方がよ！ 性別はともかく人間にしとけよ！」
そういえば同僚は謁見室で二人をちらっと見掛けただけだったか。

「……リック殿は人間で女性ですよ。猫の姿は事故です」
そう注釈して、事の次第を語り始めた。

王に暴力を働いた（リックが額を引つ掻いた）罪で由梨と理久が牢屋に放り込まれたのは昼過ぎのことだ。それから激昂する王をなだめたりさまざまな後始末をしていると、あつというまに日暮れが近くなった。アーロンは仕事をいったん切り上げ、牢屋がある地下へ向かった。警備をしている兵士に多少の心づけ（というか、賄賂）を握らせ、食事の配給を代わってもらう。もちろん、口止め料込みだ。

「……ユーリ殿、リック殿」

「あ、魔術師さん」

「死刑宣告でもしに来たか？」

夕食が載ったトレイを置くと由梨が手を伸ばしかけたが、理久が阻んだ。毒を警戒しているのだろう。

「あなたがたの処遇はまだ審議中ですが、いい方向に転ばないことだけは確実だと思われます。」

「例えば……？」

「このまま牢獄にとどまっていたかどうか、あるいは」

「あるいはさつくり口封じ、ってところか？」

尾をぴんと立てて、姿勢は低くしたまま。牙こそ見せていないものの、警戒心はむき出した。

「遺憾ながら、恐らくは。とりあえず食べてください。神と精霊に誓って、毒など入れてはいません」

「……理久、食べよ？ 多分この人は嘘ついてないよ」

「出たよ、由梨のお人好し」

悪態は止めないまま、理久はミルクが注がれた皿に近寄る。

その時だった。理久の姿がブレたかと思うと 黒猫の姿は

消え、そこにいたのは十代半ばと思われる長身の少女だった。

全裸の。

「んなつ！」

「あわっ」

「……へつくし！あれ、戻ってる」

慌てるアロンと由梨をよそに、理久は自分の両手を見ていた。

「り、理久！ 裸、裸！」

「猫の時に服脱げてたんだから当たり前だろ。……あー寒い。悪い、

その毛布取って」

「はいこれ！ 魔術師さん、取り上げられた荷物の中から理久の服持って来てあげてください！」

「無駄だ。完璧にフリーズしてんぞ」

理久の指摘通りアーロンは顔を赤くしたまま固まっていた。魔術師というのは、基本的に研究優先の生活で異性と接する機会を逃しやすい。研究第一で過ごしてきたアーロンは……年齢から考えるとありえないほどの奥手だったりする。たとえそれが凹凸に乏しくて色気のないものでも、アーロンにとって少女の裸体は刺激が強すぎた。

理久が服を着替えられたのは、悲鳴を聞き付けた兵士がアーロンを回収したあとだった。

「なるほどなあ。そりゃ責任取らなきゃ男じゃねえな」

全て聞き終えると同僚の男はニヤニヤ笑いを復活させた。

「ですがリック殿は不慮の事故だからどうでもいいと……。」

「そりゃそういうだろうさ。ま、とりあえずプレゼントで機嫌とつけ」

「……そうします」

その夜はそのままからかい倒され、翌日アーロンは二日酔いに悩まされることになる。

さて、その後の話だが。

実際、理久は裸を見られた件に関しては何も思っていないかった。

理久は兄が三人いる。うっかり裸を見たり見られたりすることが何度もあった。理久にとって『うっかり裸を見られた』というのは精々『曲がり角で出会い頭にぶつかった』と同じ程度の重さしかないのだ。

そのためだろう。アーロンがプロポーズしているのは由梨だと認定していた。そしてある日アーロンに真つ赤な薔薇の花束と金剛石の指輪を渡されると　花束は物置に突っ込まれ、指輪は消し炭と金属片へと早変わりした。

「あああ！」

「何してるの理久！　もったいない！」

「薔薇はあとで調合に使うさ。由梨を嫁にしたけりや殴り合いで私に勝ってからにしろ。私を嫁にするつもりなら諦めろ。とりあえずとつとと帰れ。んで、帰還の魔法ができるまで来んな！」

理久はヤクザキックでアーロンを追い出しにかかった。

「じいさま止めてー！」

「こんな面白い見せ物、止めるわけなかるう」

「そんな、師匠！」

「由梨、塩　　は生温いから唐辛子の粉末持って来い」

そんな義務感からの求婚と苛立ちからの拒絶は、まだしばらく続くのであった。

恋愛話は似合わない（後編）（後書き）

そんなわけで、この話に恋愛タグは付きません。そこに愛はありませんから。

宛てのない手紙（前書き）

ほぼ一発ネタです。

宛てのない手紙

「拝啓 兄上様方

私たちが異世界に問題無用で放り出されてから季節が二回巡りました。兄上様方におかれましては、あいもかわらず梅雨時のカビか真夏のゴキブリ並にご健勝のこととお喜び申し上げます。ところで失恋連続記録は未だ更新中でしょうか。

私はと言えば何故か猫に変身する体質になり、世間的には由梨の使い魔扱いされています。そのため子供たちに追いつけ回されたり、そつえば貴族の令嬢に買われそうになったりしておりますが概ね平和です。こんな日常を平和と言い切れるような精神に鍛えあげてくださいやがった鬼……もとい兄上様方の教育の賜物です。

兄上様方の脅迫めいれいどおりに由梨に悪い虫が付かぬよう、日々注意しながら過ごしております。いい年こいてシスコンな兄を持つて幸せです。ええ、実際に妹なのは私で由梨は従姉妹ですが突っ込む気力はとうに失せております。

では、届けるつもりも宛てもない手紙はこのへんで。あとで風呂の焚き付けにでも使います。

あなたがたの忠実なる弟より
『

「……り、理久……」

工房の机の羊皮紙に日本語が書かれていたので、反射的に読んでしまった。見慣れた書体で書かれていたのは伝言でも研究メモでも

なく、愚痴そのものだ。おそらく書くだけ書いてストレス解消したら燃やして捨てるつもりだったのだろう。

少し悩んだが、見なかったことにしてそつと羊皮紙を裏返す。

せめて今日の夕食は理久の好物にしてやろうと思った。

宛てのない手紙（後書き）

兄は妹を可愛がるとか、幻想だと思っています。

『故郷の味』再現プロジェクト（前書き）

修学旅行でカナダに行った身内は、1日で和食の禁断症状になったらしいです。

『故郷の味』再現プロジェクト

由梨と理久はマレビトだ。この世界に墜ちて来た当初こそ生きることや生活に慣れることに必死だったが、人間は慣れると様々な欲求が顔を出しはじめる。

この二人の場合、慣れない食生活がストレスの元となった。

異国の植物についてまとめた図鑑を見ながらティータイム。ただし茶請けはクッキーのほかは何故か漬物。由梨はクッキーを一口に放り込んで図鑑を開いたまま机に置いた。

「結局、炊きたてご飯は諦めなきゃかあ」

「だな。このサイラってのがそれっぽいけど、南方の国でしか作られて無いとなると……」

「手に入れる方法がなさそうだもんね。アーロンさんに頼むのもアレだし」

机の上に座った理久は漬物をぱりりと齧っている。粉屋から仕入れたふすまを使った漬物床は一応の成功を見せていた。特に『師匠』には非常に気に入られ、すすめられるまま市場で売っていたりもする（そして、それなりに売れる）

「ところで、猫に漬物ってアリなの？」

「猫なのは見た目だけだ。家の中でくらい好きなもの食べさせる。大変なんだぞ、猫の演技するの」

「え、そなの？ 昨日は猫じゃらしにじゃれ付いてたから心も猫なんだと思っただ」

「……じゃれなかったらがっかりされるだろ」

昼寝ばかりしているのきな黒猫と思われがちだが、理久は理久なりに商売に気を使っている。接客を由梨に任せている分、猫とし

ての愛想は義務のようなものだった。^{サービス}

「大変なんだねー。あ、理久。これなんて読むの？」

「ん、それは……サイラの特徴か。粒は長く、野菜の代用として使われる……だとさ」

「えー、インディカかー。じゃあやつぱり無理だね」

「だな。……米は無理でもせめて蕎麦ならと思ったけど、これまたレベル高いしな」

理久は皿から水をぺろりと舐めた。蕎麦も、似たような植物が無いでもなかった。が、二人とも蕎麦うちのスキルが無い。そしてまずい蕎麦がどれだけ地獄なのかもよく知っている。無駄な賭けをする気は無かったのだ。

「そだねー。お蕎麦はレベル高いし……って、そうだ！」

勢いよく立ち上がった拍子にティーカップが倒れる。まだ熱い紅茶をかぶってはたまらないと、理久は慌てて逃げ出した。

「うどんだよ、うどん！理久、前に部活で習ったって言ってたじゃん！」

「……あ！そーいやそうだよ。米に執着しててすっかり忘れてた」

この世界に墜ちる前は理久も由梨もごく普通の高校生で、部活だつてやっていた。理久が所属していたのは『男の料理同好会』なるもので、量が魅力の料理を多く覚えていた。ちなみに由梨は手芸部で、その腕前は市場で売る商品で遺憾なく発揮されている。

「小麦粉なら粉屋さんにあるし！」

「水も塩も調合に使うから腐るほどある！」

かくして、『故郷の味再現プロジェクト』がここに開始された。

料理で重要なのは、計量だ。もちろん熟練者なら目分量でどうにでもなるが、部活で何回か作った程度のものだ。無謀なことはいに限る。

まずは計量カップのようなものを作ることにした。あまり水を吸わない木を削って板を作る。理久の制服の内ポケットに定規があったので（貸していたものが帰ってきたとき、面倒だから内ポケットに突っ込んだらしい）それを使って板の寸法を測り、内側の縦・横・高さがそれぞれ十センチになるよう組み立てれば、一リットル量れる杓の完成だ。一リットルは一キロ。それを利用して大雑把ながら天秤とおもりを作れば計量自体は簡単だった。

うどんの作り方は結構単純だ。粉を水で練る。熟成させる。延ばして切って、ゆでる。理久がうどんを打てる体になる夜を待って作業は開始された。

「そういや、鍋は？あとこのボウルどっから持ってきたんだ？」

「倉庫にあつたのを洗ったの。鍋はちよつと穴が開いてたからじいさまに直してもらったんだ」

「……それはつまり、師匠はうどんに期待してるってことか。」

「うん『上手く出来たら食わせる』だって。じいさま、食い意地張ってるよねー」

「食い意地張ってるほうが長生きすんだろ。曾ばあさんだって百近くなつてあんなだ」

「冬が来るたびひとりで雪かきしようとするのだけはどーにかして欲しいって、伯父さんたち言ってたっけ。」

二人がかりで小麦粉を練った塊を踏む。これを怠るとコシのないうどんになってしまう。由梨も理久もそろって讃岐うどん派だった。充分に踏んだ塊をしばらく寝かせたあと、薄く延ばして、畳んで

から切る。ここまでくると二人は疲れも忘れて心を躍らせていた。
「うどん、うどん。これがうまくいったら天ぷらうどんも作りたいね」

「だな。そのときは出汁もしっかり作って……あ」

軽快にうどんを切っていた手が止まる。ここまで来て大切なものを忘れたことに気づいたようだ。

「そうだ。お出汁だよ。ここ、かつお節も昆布もないじゃん」

「あー、ベーコン使うか？なんか洋風になりそうだが」

「……今からやり始めたら出来上がりが遅くなるよ？」

「……とりあえず、今日は茹で上がったら塩でも振って食うか」

それからうどんを切る音もどこか重たげになった。

茹で上がったうどん自体は、大成功といってよかった。出汁も醤油もない味気なささえ除けば。

結局、『師匠』が手打ちうどんを初体験したのはそれからしばらく経ってからのこと。カルボナーラ風にアレンジしたうどんに『師匠』はいたく感激した。

『故郷の味』再現プロジェクト（後書き）

猫に漬物を与えるのはやめましょう。あと、カルボナーラうどんのカロリーは恐ろしいものがあります。食べ過ぎ注意。

『猫』の回想録（前書き）

教育上微妙によろしくないかもしれない表現があります。

『猫』の回想録

これは、理久がまだ日本で平和……というのも少々おかしいような日々をすごしていたときの話。

「ちよつと、体育館裏まで来いや」

時代遅れな台詞を吐きつつ理久の襟首を掴んで引つ張ったのは、大学の前で待ち合わせを言い出した次兄だった。そのまま本当に大学の体育館裏まで理久を連行し、今度はベストをがしつと掴んで豪快に頭突きを食らわせた。

「っ……なんでもいきなりカツアゲみたいに連行されなきゃならないんだバカ兄貴！」

「やかましい！ お前のせいで知らなくてもいい世界を知っちまっただろうが！ つーか、これみよがしに由梨ちゃん手作りのベストにネクタイかよ！ 俺に対するイヤガラセか！」

「なんで妹のワードロー^{ひと}ブ把握してんだ気色悪い。それ以前に身に覚えが無さ過ぎる！」

確かに、理久が身に着けているベストもネクタイも由梨が作ったものだ。だがこれは由梨の趣味の一環で、そこに従姉妹への親愛以上のものはない。次兄とてそれはわかってるはずだった。が、頭に血が上っていることもあって引つ込みが付かないようだった。ベストを掴んだまま理久をガクガク揺さぶっている。

「あー……もしかして、またふられた？」

途端に揺さぶる手がぴたりと止まる。凶星らしい。次兄が振られては兄弟に八つ当たりするのはいつものことだった。となると、次

の展開も予想できる。

「飲むぞ。付き合え」

「未成年つれて酒……」

「お前は飲まなきゃいい。安心しろ、黙ってりや中坊にや見えねえよ」

こうなつた次兄に何を言つても無駄だ。やれやれとため息をついて、由梨に連絡する。事情を説明すれば代わりに夕食を作っておいてくれるはずだ。

「で。なんて言つて振られたわけ」

くるくるとノンアルコールカクテルをかき混ぜてみる。頼んではみたが想像以上に甘つたるく、一口飲んでギブアップだった。

「言う前に振られた。……俺は呼び出されたんだ。期待しちまつても仕方ないよな？」

次兄と同じ授業を取っている学生がいる。仮に百合子さんとしておこつ。

百合子さんは美人だ。そのへんのアイドルが隣に立ったら、アイドルがかすんで見える程度には。加えて学業優秀、性格も朗らかだが決してでしゃばらない。大和撫子を具象化したらこうなるんじゃないかといえる女性だった。某ギャルゲーの（悪女と名高き）主人公の幼馴染な彼女をさらに美化したと思えばほぼ間違いないはずだ。次兄も他の男子学生と同じく百合子さんのファンだった。だから、百合子さんから「話がある」と告げられて浮かれても仕方の無いことだった。

浮かれてついで行つた空き教室で、百合子さんは真剣な顔で口を

開いた。

「冬沢君。私、見ちゃったの。日曜日に、冬沢君が美少年とデートしてるところ」

「……は？」

次兄はゲイではない。惚れっぽい性格ではあるが、対象はあくまでも女性だ。しかも日曜日にデートなどしていなかった。

「……日曜なら人違いだと思うんだけど。出かけはしたけど、妹に付き合わされて買出しに行っただけだし」

「言いわけしなくても大丈夫だよ。私その辺のことは理解があるつもりだから！ だから、お願い！」

百合子さんは麗しい笑みを浮かべながらメモ帳とペンを取り出した。

「取材させてほしいの！」

そして見た目は大和撫子・実態は腐女子な百合子さんの強引な取材が始まった。ようやく、理久が『恋人関係にある美少年』だと勘違いされていることに気づいた。妹だと何度主張しても照れ隠しだと思われ、挙句美少年と同棲しているとまで勘違いされ……開放された頃にはいろいろとボロボロだった。

「……とまあ、何もしてなくても誤解と勘違いはいつものことだったからな。猫扱いされようと、善意で生肉を食わされようと、私的にはいつものことってわけだ」

手土産を持って訪れたアーンとの暇つぶしの雑談。アーンがすっかり『理久が猫扱いされてもあまり怒らないのは何故か』と訊

ねたのが始まりだった。

「そんなこともあったよねー。その人ってば理久んちに押しかけた拳句『禁断の兄弟愛！』とか勝手に盛り上がってたっけ」

「そうそう。そんで上の兄貴と下の兄貴まで一時的に女性不信になったな」

「……わたくしも女性不信になりそうです……」

渴いたのを潤す為に飲んだワインは、変に酸っぱい気がした。

『猫』の回想録（後書き）

このエピソードに出てくる腐女子はネタ的に誇張したものです。実際の腐女子はもっと常識的な人たちが多いだろうことをフォローしておきます。

惚れ薬事件

「伝説で材料になっているのは……イモリの黒焼きとか、リンゴにザクロつてところか？あとはハーブだとローズにネロリにクラリセージ……は在庫あったっけ」

「相変わらずどーでもいいこと詳しいよね、理久ってば。でも、リンゴもザクロも季節じゃないよ。ハーブは……まあ、裏庭と倉庫をあさればありそうだけど」

「雑学と言ってくれ。お前も引き受けるな、こんなもん」

大釜の中身をかき混ぜる由梨の横で、理久は羊皮紙に日本語で何かを書いている。大きく丸で囲ってある字は『猫用惚れ薬』。机を叩く指は苛立たしげだ。

「仕方ないじゃんリユリユたつての頼みなんだから」

依頼を持ち込んできたのはリユリユだった。得意先のとある貴族が最近猫を飼い始めたのだという。しかし猫が気まぐれなのか、貴族に猫を不快にさせる何かがあるのか……とにかくつかれないのだそう。

「なんか話聞いているだけでも気の毒でさあ。ユーリ、魔法の薬で猫に好かれるようなものってない？」

「え、どうだろう。調べてみるよ」

「よろしくね。できあがったら、あたしに渡してくれる？ お得意様にユーリのお店をばっちり紹介しておくから」

そんなわけで理久と由梨はこうして書物と材料に埋もれている。

材料の選別は目端が利く由梨、魔法陣の構築は理久の担当だ。『師匠』は高みの見物を決め込むつもりらしい。そもそも『師匠』は財あるものや権力者が大嫌いなので協力するはずも無い。書物と材料は好きに使えと言っただけマシというものだろう。

「ん、とりあえず媚薬っぽい処方 was かった。問題は猫に限定させなきゃならんだよな」

「うーん、マタタビ入れとく？ 効果は昼になつたら理久で試すつてこ……あいたつ」

材料を乳鉢ですりつぶしていた理久は乳棒を投げつけた。猫になる体質は本意ではないし、猫になったとしても体質自体は人間のままだ。動くものにじゃれ付くのも毛づくろいも「フリ」にすぎない。「とりあえずマタタビは入れておくか。他の素材と反発しない程度の量となると……」

以前うどんを作るときに即席でくみたてた計量器はなかなか有用だった。由梨がヒマさえあれば改良している。マタタビ粉の重さを慎重に見極め、乳鉢の中に入れた。

「由梨。釜の中のを五？。一滴ずつな。魔力も流し込んで」

「はいはい。」

由梨が慎重に魔力と材料を流し込んでいくと、魔力に反応して乳鉢の中身がその姿を変えていった。

原理で言えば間違いはないはずだった。ただ、二人にとっては予想外なことに できあがったものは揮発性が高いらしく、気がつけば乳鉢の中は空っぽになっていた。

「……あれ？」

「げ、魔法陣に不備があったか？ 全部消えるとは思わなかったんだが」

「じゃあ、失敗？」

「とりあえず。仕方ない。師匠に頭下げて手え貸してもらうか。とりあえず、今日はもう寝とけ。私は採取行ってくる」

しかし、二人は気づいていなかった。揮発するというのは『成分が消える』とイコールではないことに。そして、自他共に認める不幸体質の理久が最も近くにいたため 猫用惚れ薬の成分をもろに浴びていたことに。

気づいたのは翌日だった。市が立つ日なので商品を抱えて市場まで行く途中、何故か猫がついてくるのだ。それはもう、そろそろと。

「……ねえ、理久」

「……言うな。私は信じたくない」

「……ってことは、確信してるんだね」

「とりあえず、このままだと市場に迷惑だな。由梨、今日は一人で店やっつけ！」

返事を聞かずに理久が由梨から離れて駆け出すと 案の定

猫たちは理久を追いかけていった。

「うわあ、あたし猫派だけど……あれはうらやましくないや。」

森まで逃げ込めばあとは『師匠』特製の結界がなんとかしてくれるだろう。偏屈で人間嫌いの側面もたまは役に立つはずだ。

理久は水泳と殴り合い以外は全て平均以下の、ありていに言うて運動オンチだ。それは猫になっても変わらないようでじりじりと猫

軍団との差はつめられる一方だった。

「だああ、くっそ！」

この先にはさほど広くないが川がある。とにかくそこまで走って泳ぎきる！そうすれば森はすぐそこだ。猫は水を嫌うから、そこである程度引き離せるはずだ。そう信じて必死に四つの脚を動かすと川が見えた。

「頼むから怯んでくれよっ！」

大きくジャンプして川に飛び込み、泳ごうとするが

「どわああっ?!」

何せ運動音痴だ。普段と違う体で泳ごうとしてできるほど器用じゃない。そのままどこかの桃よろしく流されていき……どうにか岸に泳ぎ着いたときは、薬の成分が全て流れ落ちていたが森から遠く離れてしまっていた。

「あー、ひどい目に遭った……」

「あ、おつかえりー。そろそろ日が暮れるよ」

「おお、帰ったか黒猫。随分愉快なことになったようじゃの？」

日暮れ直前に帰ってきた理久を出迎えた二人に労わりの色はほとんど見えない。まあ、それもいつものことだ。棚に飛び乗ってタオルを引きずりだし、自室に戻る。人間に戻ったらすぐに服を着たかった。

「理久ー、聞こえるー？ 入っていい？」

「だめだ。今着替え中」

ズボンをはきつつ応えようと、由梨はそのままでもいいやと言って本題に入った。

「あのねー、じいさまが猫用惚れ薬のレシピ持ってるってー。すごく笑わせてくれたから、ご褒美でくれるってさ」

「っ……師匠！ 持つてるなら最初からくださいよ！」

勢いよく扉を開けると蝶番が外れて飛んだ。

「若人の探究心を摘むなど、隠者としてあるまじき行為じゃからなにやにや笑いなから嘯く『師匠』は基本的に放任主義だ。それは理解しているが……今回の騒ぎは面白がる為に放置していたように思えてしまった。

「材料自体はいい判断じゃったが、あの魔法陣は不備が多かったのう。まだまだじゃな、小娘に黒猫」

笑う『師匠』にどのような反撃をしたものか悩む理久だった。

ちなみに猫用惚れ薬は無事に完成した。効果は抜群だったらしく、この貴族はそれからモリユリユ経由で二人にさまざまな依頼を持ち込むことになる。

そして、それに比例して理久と由梨の気苦労も増えていくのだった。

錬金術士体験学習・台風襲来編（前書き）

続き物っぽくなります。

錬金術士体験学習・台風襲来編

「お久しぶりですわ、錬金術士さん！」

「……。」

市場にあるユーリの店【アトリエ・ユーリ】の前にいるのは高級そうなドレスの少女。あまりの場違いさ加減に啞然とするしかない誰だっただろうか。見たことがある気がするものの、由梨に貴族の知り合いはいない……と思ったら、理久が売り物を置いたかごの中に隠れた。その様子でようやく思い出した。

「あー！ 何時だったか理久を欲しがった人！」

「大正解ですわー！」

令嬢は能天気な完成と共ににはしゃぐように飛び跳ねた。ハイヒールで飛び跳ねる姿は他人事ながらハラハラさせられる。由梨の心配をよそに令嬢は優雅に着地してスカートの裾をつまんでみせた。

「わたし、サラ・トラウモント・マイヤーと申します。実はお願いがあつて参りましたの。」

嫌な予感がする。現に理久は既に逃げていた。直感なら由梨のほうが優れているのだが、『悪い予感』に関しては理久は非常に敏感だ。本人曰く『不幸体質にとって危機察知能力は必須スキル』らしい。もつとも、察知しても間に合わないことのほうが多い。

「わたくしに錬金術を教えてくださいださらない？ 弟子にして欲しいんですの！」

そして、今回もやっぱり間に合わなかったらしい。

トラウモント家はそれなりの力を持っている。歴史は浅い方だが、何代か前の当主が農地改革を成功させてかなりの財力がある。ついでにここの領主 アーロンの実家でもある シュタインベック家とは深い付き合いがあり……

「つまり、私らが断るのはちよいとまずい。世話んなってる大家に何か迷惑がからんとも限らないしな。」

その隙に理久が小声で現状を説明した。理久は使い魔だと思われるので、小声の会話ならあまり怪しまれない。周りからみれば使い魔が主人に何やら話しているとしか思われないのだ。もっとも、人間の言葉を話しているとばれるのだけは避けているが。

「あたしたちがお姫様を弟子にしたら、それはそれでご領主様に迷惑じゃない？」

「すげなく断って姫様に泣かれるよりはマシだろ。一応、大家^{ぢやう}とこに報告だけしとく。店終わったらリユリユンとこでワイン買つていってくれ。師匠の機嫌とるのに使う。」

最後にひと声「にゃあ」と鳴いてサラに愛想を見せると、理久はあつという間に市場を出た。

逃げられたと気づいたのは、市場からの帰り道だった。

理久は既に帰ってきており、由梨宛とサラ宛の書簡まで手に入っていた。サラ宛の手紙には「先方の迷惑になるから迎えが来たら戻って来い」とあったらしい。由梨宛の手紙は「明後日、迎えがそちらに行くよう手配した」とのことだった。

そんなわけで、サラの『錬金術士体験学習』がなしくずしで始まることになってしまったわけである。

ちなみに、『師匠』はワイン一瓶では説得されなかった。代わりに新しい酒の研究を約束させられたのだった。

錬金術士体験学習・台風襲来編（後書き）

異世界側キャラの苗字は、日本語で意味を考えてからドイツ語変換してます。

わかる人が見たらサラの苗字はかなり変です。まあ、ファンタジーと言っことで。

錬金術士体験学習・遭遇編（前書き）

ちよつとだけ流血表現があります。

錬金術士体験学習・遭遇編

「ユーリさま、泡が出ましたわ!」

「うん、シャオム草使ってるからねー。その泡で洗うんだよ。」

「わかりましたわ。リックさま、きれいにして差し上げますからねっ。」

嬉々としてたらいの中の湯を泡立てるサラと指導するユーリ。とても楽しそうな二人を、黒猫がじっとした目でにらんでいる。

(……どうしてこうなった!)

それは領主から『サラ嬢の機嫌を損ねないように』と依頼……というかほとんど命令が下っているからだ。シュタインベック伯爵テオドール。アーロンの兄にして由梨と理久の大家ともいえるこの御仁は、にっこり笑って無茶を言うタイプだった。

その彼が、机の上に乗って沙汰を待つ理久を撫でながらこう言ったのだ。

「トラウモント卿はサラ嬢に甘いんだ。あとあと面倒が無いよう、機嫌を取っておいてくれないかな?」

社交界でも人気の中年貴族は公正かつ寛大だ。由梨と理久の立場を(秘密込みで)深く理解しており、偽りの身分を与えたりして二人を守ってくれてもいる。二人に無茶はさせるが無理はさせない。時折持ち込む無茶振りさえなければ、領民思いのいい領主。それがテオドールに対する二人の評価だ。

先日調合したばかりの猫用シャンプーにサラが目をつけ『リック
さまを洗って差し上げたいですわ!』なんぞと言い出して今に至る。
ごしごしと危なっかしい手つきで洗われるのをじっと耐える。理久
はスキンシップの類が苦手だ。さらに人間の状態で清潔にしておけ
ば猫の状態でも反映されるのでノミ知らず。つまり『猫シャンプー
は不要』なのだ。

最後に水をざばつとかけられてシャンプー終了。ぶるりと身を震
わせて水を吹き飛ばしてようやく落ち着いたところを、今度はタオ
ルに包まれ、抱き上げられた。サラだ。

「みにやつ!」

「いい子でしたわねー、リックさま。さっぱりしました?」

「……にゃお。」

「あ、できれば座らせたまま拭いてあげて。リック、抱き上げられ
るのはあんまり好きじゃなくて。」

由梨はさりげなくリックを奪って救出した。サラは残念そうな顔
で従ったが、目を離せばまた抱き上げそうだ。

「残念ですわ。『抱き合えば　ぬくもり二倍　愛情百倍』ですのに。」

「お芝居のセリフかなにか?」

「父と母の口癖ですわ。」

サラは自慢げに微笑んだ。どうやらトラウモント夫妻はそういう
性格らしい。

「あら、リックさまは?」

すっかり日も暮れたので夕食にした。由梨、『師匠』、サラが食
卓に揃うが、そこに黒猫はいない。

「理久? うーん、たぶん……夜のお散歩?」

それらしいフォローを入れつつ『師匠』に視線で援護を要求するが、『師匠』は我関せずの姿勢でウオツカもどき（実験中に偶然できてしまった）を飲むばかりだ。理久がおそらく夜明け直前まで戻ってこないことは簡単に予想できる。おそらくは採取だ。夜は冷えるが、夜の森は理久のテリトリーでもある。獣避けの道具もあるし、心配は要らないだろう。

帰ってきたときサラと鉢合わせしないように工夫さえすれば。

由梨の推測どおり、理久は森の中にいた。罾を仕掛けてある場所を回り、かかっていたウサギを回収していく。湖のそばで火を起こし、ウサギを捌いた。毛皮と脚はアクセサリの材料、肉は食料。繁殖力も高い。理久たちの生活には欠かせない獣のひとつだ。血抜きし、絶命したウサギを前に祈りをささげる。森の恵みや命に感謝をささげるのは万国共通らしい。この世界の祈り方は知らないのだから己流だが。

一通り作業を終えると、血で汚れた手と顔を洗う。服は……

「あ、シミ取りの薬忘れてきた。」

帰ってから染み抜きをしなければならぬだろう。

季節は夏に近づいている。イリアナの天文の法則は地球とそう変わらないらしい。そしてこの国は随分北にあるらしく、夏が近づくにつれ夜は驚くほど短くなっていく。日が出てしまうと猫の姿に逆戻りだ。採取と処理を終えると、急ぎ足で家路についた。

そして、帰ってきた理久は。

お約束と言っべきか、のどが乾いて目が覚めたサラと鉢合わせしてしまった。

「あ。」

「……?!」

採取と言っよりは狩猟に近いことをしてきた帰りだ。理久の服はところどころ血で汚れており、手はウサギ（しかも皮を剥いである）を握っている。貴族の令嬢が見るには少しばかり猟奇すぎた。

（見なかったことにしてくれないかなー）

そんな甘いことを考えた直後、絹を裂くような悲鳴が響いた。

続く

「きゃああああっ！ 人殺し、通り魔、殺人鬼ですわっ！」

とんでもない悲鳴で飛び起きた。慌てて裸足のまま飛び出すとそこにいたのは、いまだ叫ぶ貴族の令嬢と引きつった顔の相棒。人間の姿でいるところを見ると、まだ夜明け前らしい。

「なんだ、びつくりさせないでよー。サラ、その子は……」

正体を明かそうとすると、背中に回りこんだ殺人鬼に口をふさがれた。そこでどうやら自分がまだ寝ぼけていたらしいことに気づく。（おいこら。んなこと、この姫サマにばらしても状況悪化にしかならんだろうが。）

低くささやかれたその声に硬直した。考えてみれば、理久の体質を明かしたところで悪い方向にしか転ばない。秘密を知る者は少ないほうがいいに決まっている。

（じ、じゃあどうすれば……?!）

（そのくらいお前が考えろ。猫と今ここにいる私が別物だと思わせればそれでいい）

（う、え、えーっと……）

アイコンタクトでの会話は、しかし令嬢から見れば殺人鬼に捕らえられた少女の図にしか見えなかった。早く誤魔化せとばかりに睨む姿も、事情を知らないサラが見れば凶悪犯の所業にしか見えない。混沌の一途をたどるその場に、場違いなほどのんびりした声が割り込んできた。

「何事じゃ、うるさくて眠れん。」

『師匠』だ。さすがに騒ぎで起きてきたらしい。由梨を拘束する理久（人間状態）に、それを指差して悲鳴をあげるサラ。それだけでおおよそ把握したのだろう。理久に近付くと、杖で頭を小突いた。

「何をしておる。早いとこ獲物を氷室に入れんと腐るじやろうが。」
この場を離れるためのフオローだ。これ幸いとばかりに理久は逃げ出した。

「ありや、居候じゃ。ちいと訳有りて夜にしか動けん体質での。」
「そ、そうそう。夜じゃないと採取できないモノもあるでしょ？」
そういうのはあの子の担当なの。あんまり人前に出ないから、紹介しにくくてさ！」

理久は由梨共々、この家の居候だ。『昼間は猫の姿だから』夜にしか自由に動けないし、『昼間は猫の姿だから』本来の姿で人前に出ることはない。嘘は言っていない。重要な部分を隠しただけで。
「騒ぎの原因がそれだけなら、ワシは寝なおすぞ。老体には堪えるわ。」

『師匠』が去り、まだ狐につままれたような顔のサラを寢室に押し込む。あとで理久に説教だと決めて、由梨も一度ベッドに戻った。

氷室といっても本当に氷を使って冷やしているわけではない。魔力の流れを操作して室内の温度を一定に保っている……とは『師匠』の説明だ。彼は元々エンジニアの類だったのではないかと、理久は推測している。捌いたウサギを放り込み、氷室を出たところでタイムオーバー。服を残して猫の姿になってしまった。

「なんじゃ、もう夜明けか。」
「師匠。」

「あの客人は適当にごまかしておいたぞ。……火酒一樽じゃな。」
にやりと笑う師匠はどこまでもしたたかだ。弟子のフオローにも対価を要求する。このしたたかさがあつたから貴族達から嫌われたんじゃないかと、弟子たちは邪推していたりする。

「……飲みすぎです、師匠。小麦酒一樽。」
「ま、そのくらいは負けてやるわ。感謝せい。」

愉快そうに笑いながら師匠は去る。酒造関係は理久の担当だ。由梨がアルコール耐性ゼロのため、否応無しといった感じた。まだ二十歳になっていないので良心がとがめてはいるのだが。

とりあえず、脱げてしまった服をどう片付けたものかが一番の問題だった。

「……で、これは猫用だからマタタビを入れるんだ。」

サラは猫好きだからと『猫まねき』を目の前で調合してみせる。騒動の元になったものだ。そういえばあの薬を依頼したのはサラの母だったらしい。

調合する由梨の横で、理久は睡眠中だ。黒猫状態の理久を撫でながら、サラはどこか上の空だった。

「ねえ、ユーリさま？」

「ん、どしたの。やってみたいとか？」

魔力が必要な工程は既に終わっていて、あとは簡単な仕上げだけ。それくらいならサラにやらせても平気だろう。フラスコを差し出して、サラは違うとばかりに首を振った。

「あの……今朝の方に謝りたいのですわ。」

「あ、あれなら気にしなくて平気だと思うよ。」

「ですが……」

「変な話だけど、誤解されるのに慣れてるタイプだからさ。多分今頃はすっかり忘れて寝てるって。」

実際そのとおりだ。年齢性別その他諸々、誤解は日常茶飯事だ。由梨と話していたらカツアゲかと勘違いされたこともある。さすがに殺人鬼扱いは初めてだが。

「そ、そうなのですか？」

「うん。昔からの付き合いだけど、もう誤解なんてしょっちゅう。」

フラスコの中身をクリスタル製の香水瓶に移せば完成だ。緑がかった液体が日光を透かしてきらりと輝く。

「はい完成。お土産にどうぞ。」

「あ、ありがとうございます。それでその……」

瓶を受け取りながらも、サラはまだ何か言いたげだ。そろそろ話を逸らすのも限界らしい。雲行きが怪しい。何か別の話題を探してみるが、見つかる前にサラが言葉を続けてしまった。

「あの方とはお付き合いされてるんですか?!」

「……は？」

「あの方のことをよく理解していらっしゃるようですし、思い返してみればユーリさまはかわいらしくて、あの方は凛々しくて……その、お似合いだなあって……」

顔を赤くして訴えながら、少しずつ声は小さくなっていく。まずい。この流れは非常にまずい。

「けれど、わたくしは諦めたくないんです!こんなに胸が高鳴ったのは初めてなんですもの。」

「それは……」

どう考えても釣り橋効果というか、誤解だろう。確かに理久は少年と言われた方が納得できる容貌だが、一応は女だ。しかしどこを訂正しても追及されてボロを出しそうだ。由梨は嘘がつけない。しばらく考えて結論を出した。

「えーと、とりあえず、あたしと恋人ってわけじゃないから。うん」

後始末は投げることにした。サラは明日帰る。今夜を乗り切れば、一時の感情など忘れるだろう……多分。

由梨の願いも空しく、夜にまた一騒動起きた。サラは人間状態の

理久をどうやってか捕まえてしまったのだ。

「……由梨。」

睨む相棒に合掌する。これ以上フオローするは無理だ。

サラはそんな空気も気にせずに理久を見上げた。

「あの！わたくし、サラ・トラウモント・マイヤーと申します。今朝は失礼なことを言ってしまったて、その……」

「朝の件なら気にしてない。」

ため息をつきつつ目をそらす。関わらないようにしているのが見え見えの態度だが、恋する乙女のフィルターを通せば、それも『ぶつきらぼうで照れ屋』に早変わりだ。恐るべし、恋する乙女。しかもさりげなく理久の手を握っていたりする。

「あの、お名前を聞かせてください。」

「……リカルダ・ヴィンター。」

『冬沢理久』の即興での偽名だ。ヴィンターはドイツ語で冬。リツクはリカルドの愛称なので、そこから女性名に無理やり変えた。しかし、恋する乙女フィルターは理久の苦肉の策さえ捻じ曲げてしまった。

「あの、わたくし、明日戻ることになっているんです。」

「……知ってる。」

「それで、その……お手紙書きますっ。わたくしのこと、忘れないでくださいませリカルドさまっ」

その瞬間、理久が由梨を睨む目がさらに険しくなった。

数週間後。理久は届いた手紙に目を通していた。

「お嬢様、なんだって？」

「……読んでみる。」

便箋を投げ出して頭を抱えた。樹皮を使つての紙はこの辺りでは

高級品だ。さらに香水が吹きかけられているあたりさすが貴族の令嬢と言うべきか。その香りにやられたのか、文章にやられたのか……おそらくは両方だが。

「はいはい、なにに？」「またお会いしたいです。こちらは薔薇の花がさかりですが、あなたがいなければ色あせて見えます……？貴方の黒髪は禁忌だとわかっておりますが……」すごい。熱烈だねえ。」

「お前、いったいなんて言っではぐらかした？」

「何って……黒猫理久と人間の理久が別物だと思わせて、あと理久とあたしが恋人だと思われてたのは訂正しといた。」

「……一応私は『リカルダ』と名乗ったつもりなんだが。」

「恋は盲目っていうか、聞き間違い？」

なんとも気楽に承えてくれる相棒の後頭部を景気よくひっぱたく。抗議の声は黙殺した。

『一時の感情だからすぐ忘れる』という二人の希望をよそに、サラは以降も『リカルド・ヴィンター』を理想の異性として憧れ続けた。種明かしするにできない不毛な片恋は、親に押し付けられた婚約者にサラが一目ぼれするまで続くことになる。

錬金術士体験学習・騒動編（後書き）

お嬢様はまた出したいキャラです。

空を自由に飛ぶ方法

「頭につけるタイプのプロペラは？」

「SFすいふじぎワールドのあれか？ そのまま再現しても、首がもげるだけらしいな」

「背中に翼をつけてみるとか……」

「太陽に近づいたら墜落死しそうだからなあ。」

「うう~~~~。」

石を削って作った黒板に由梨がアイディアを書き込むが、理久が片っ端から雑巾で消していく。筆記に使うチョークは町の居酒屋に譲ってもらった貝殻を砕いた粉で作ったもので、理久的に最近の最高傑作だ。

「お嬢もお嬢だがお前も真に受けるな、実践しようとするな。錬金術は万能ってワケじゃないって師匠も言ってたろ」

「わかってるよ。でも不可能に挑戦するのが錬金術の定義でしょ」
口を尖らせて由梨が言い募ると、どうやら痛いところを突かれたのか黙り込む。気が乗らない研究から逃げる為のいいわけだったらしい。

「ただでさえ師匠に命令された酒の研究で忙しいのに……」

「でもさ、やっぱり人間にとってはロマンだと思わない？」

由梨は芝居がかった仕草で両手を広げながら立ち上がった。

「空を飛ぶ、なんてさ」

発端はサラ嬢からの手紙だった。『リカルド・ヴィンター』への愛の言葉に夢見がちな少女らしい表現があったのだ。『もしも空が飛べたなら、すぐにでも貴方の元へ参りますのに』これに乙女心を刺激された由梨がノリノリで研究を始めようと言い出したわけだ。

「研究は分担って言っても、理論構築は結局私だろ？　ったく、気楽に無理難題ふっかけやがつて…。」

「じいさまに心当たりないか聞いてみる？」

「やなこった！　頼んだら対価を吹っかけられるだろが。この上さらに師匠の無茶振りなんて、想像するだに怖ろしい」

「じゃあ、まずは書庫だね」

「書庫で資料を探すのは私だろ？　古代語をろくに読めないからって気楽だよな、お前」

恨めしげな理久のぼやきは聞こえないフリをする、基本的にちゃっかり末っ子属性の由梨だった。

そもそも人間は飛行に向いていない。離陸する為に助走するにしても、人間の脚力では地面を駆けるだけで精一杯だ。翼の代用品を背負って走れば数瞬程度は『浮く』くらいなら可能だろうが。よしんば飛行できるだけの力を手に入れても、肺の問題がある。空高く飛べば飛ぶほど空気は薄くなる。そして人間の肺は鳥ほど効率よく酸素を取り入れるようにできていない。

「つまり、飛ぶ方法以外にも課題が多いってこと？」

理久が知る限りの知識（一度読んだ本の内容は忘れないという特技を持っている）を語ると、そこで由梨が手を挙げて質問した。その通りだと頷いて続ける。

「まあ飛ぶ方法はともかくとして、あとは風圧な。映画でみたことあるだろ、車の屋根に張り付くアクションヒーロー」

「あるある。ふっ飛ばされちゃいそうだったよね」

アクション映画は理久の長兄の趣味だ。由梨も付き合っ（付き合わされる理久に巻き込まれる形で）いくつか見ている。

道具を使っ（て）て飛ぶにしても課題は残されているようだった。

「方法自体はなんとなく浮かんじやいるんだが……たぶん、尋常じやなく魔力が必要なんだよな。調合のとき魔力使う部分はお前の担当だからな」

「ん、わかった。準備ができたなら教えてねー」

そうして研究はさらに続いている。

研究が始まっ（て）から半月後、ようやく飛行アイテムの基礎理論が完成したようだ。設計図を見た由梨は目を丸くした。

「……じゅうたん？」

「そ。昔、海斗兄貴がやっ（て）たゲーム思い出してな。飛ぶっ（て）か浮き上がるだけならたぶん行ける」

海斗とは理久の三人目の兄だ。上の兄二人と同じく由梨を溺愛し、理久は半ば弟扱いしていた。余談だが想い人にゲイだと誤解されて落ち込んでいた次兄は颯、長兄は昂（はな）と言う。覚えなくてもいい。たぶんこれ以降でてくることはないだろうから。

「浮き上がる……ねえ？」

「飛ぶ為には推進力と方向転換も必要だろ。試作段階でそこまで詰め込んでられないからな」

「飛ぶっ（て）、意外と複雑なんだね。ただ浮けばどうにかなると思っ（て）た。」

材料は東方から渡っ（て）きた厚地の布（由梨が元々は冬服に使う予定だったと嘆いた）に空気の渦を作り出す装置、それを結びつける為の魔法陣。理久の想定ではホバリングするじゅうたんが出来上がる予定だった。

《告げる。我は理を知る者、真理の僕。森羅万象を司る精霊よ、我が声に応え来たれ》

呪文が調合の始まりを告げる。

本来、錬金術士は一人で魔力を流し込み、素材を混ぜ合わせ、原質から任意の要素を取り出すことで調合する。しかし由梨は原質を扱うための能力が不安定、理久は魔力がほぼゼロ。二人がかりで調合するしかない。

一見すると出来損ない二人がどうか協力しているように思える。しかし、実は二人で調合するのはかなりの高等技術だった。綿密な打ち合わせと、何よりも術者の相性が重要だ。一人でする調合よりもはるかに高度なものができるとされる一方で、王家に仕える錬金術師でもなかなか成功しないといわれている。が、本人達はそれを知らない。『師匠』は気づいていながら教えるつもりは無いようだ。

「風精霊に魔力を……そう。ちょっと強い、弱める」

「うっ、面倒くさいなー。これでいい？」

「そうだ。《望むは風の力。くびきを解き放ち、空へ駆け出す力》」
古代語でつむがれる願い（じゅもん）によって、混沌へ却った物質が望みの姿へと変化していく。草を葉に、鉄くずを武器に、土くれを命あるものへと変化させる力。これこそが錬金術だ。

ぼんやりと素材が変化していく。やがて曖昧だったシルエットがはつきりと浮かんでくる。

「オッケー。たぶん出来上がりだ。お疲れ」

「……っは~~~~、つかれた！」

そこでようやく張り詰めていた緊張が解けた。調合は体力も精神力もかなり使う。慣れた調合ならそれほどでもないのだが研究としての調合の後は立ち上がるのも面倒になる。

「さすがにすぐ実験ってワケにもいかなそうだな。昼になったらやるか」

「そだね。まずは寝よ。あたしもう限界……」

それでも簡単な片付けだけはして、寝室で泥のように眠った。

そして、昼。森の中の少しだけ開けた場所にじゅうたんを運んで実験することにした。

「ところで理久。これ、どのくらいの重さまでいけるの？」

「重量制限はちよつとわからんが……人間の重さはまだ無理だと思う。ためしに木の枝でも……っておい」

猫の姿で考え込む理久を問答無用で持ち上げ、じゅうたんの真ん中に載せる。

「風圧を避けられるかどうかはやっぱり自分で体験したほうがよくない？」

「それはまだその段階じゃ……」

「大丈夫、ヤバそうだったらすぐに助けてあげるから！」

につこりと、イイ笑顔で由梨はじゅうたんの隅につけられた機動装置を動かす。するとふわりとじゅうたんが浮き始めた。魔力の制御は由梨の担当。こうなつては不用意に降りるのも危険だ。

「おいこら、目的を吐け！」

「空飛ぶにゃんこなんて萌えるじゃん」

ゆるゆるとじゅうたんの四隅が高度を上げていき……

「てめえっ、覚えてろよ！」

「中身が理久なのがちよつと残念だけどねー」

やがて袋状になってふよふよと風に流され始めた。

「……うつわー」

「おいっ、感心してないで助ける！　なんか絡み付いてくるぞこれ！」

「あ、いつけない。ちょっと待ってて、今止めるからっ」

軽く飛び上がったじゅうたん……というか袋を捕まえると魔力を強制的に遮断。ようやくじゅうたんはただの布キレへと戻った。

「で、結局なんでああなっちゃったのかな？」

「密度の問題だな。たぶんだが」

中央に物を置くと、その分重心が中央に寄ってしまう。理久が作った魔法陣ではその部分のフォロワーがなされていなかった為に四隅だけが浮き上がって袋状になってしまったのだろう。

「まさか兄貴がやってたゲームそのままの展開になるなんてな」

疲れきったため息が理久の感情全てを物語っていた。

結局『空飛ぶじゅうたんプロジェクト』は理久の何かに引っかかったらしく、媚薬に並んで『二度と研究しないものリスト』の上位にあげられることになった。しかし由梨は空飛ぶ袋がツボにはまったらしくこっそり研究しているらしい。……理久の平穏が再び破られる日も近いかもしれない。

空を自由に飛ぶ方法（後書き）

ゲームが元ネタ第三段でした。

石の秘密と初恋と

『この石をあげる。僕の宝物なんだ。またこの街に来るときはきっと一人前になってるから、そのときは見に来て欲しいな』

そのときの石を父の知人に見せたところ、ただの小石だと判った。けれどリユリユにとってはどんな宝石よりも大切な石だった。

「旅芸人？」

「そ。しばらく来てなかったんだけどさ。今年は五年かに一度しかない王国祭があるからね。その通り道で営業してく一座って結構多いんだよ。」

「へえー。なんかファンタジーって感……あいた！」

開店準備をしながらの世間話。それを不意に理久が遮った。商品を並べる台に乗り、由梨を睨んだ。

（馬鹿。いかにも異世界人です的発言してどうする）

（この街じゃ暗黙の了解なんだからいいじゃん！）

（壁に耳あり障子に目ありだ）

無言で非難する由梨を一瞥し、定位置で昼寝を決め込む。昨晚は一晩中採取していたから眠気が限界なのだ。

「あれ、なんかリック不機嫌ばい？」

「たまにあるんだよね。ほら、猫ってマイペースっていうか気まぐれでしょ？ で、旅芸人だっけ？」

不思議がつて理久の顔を覗き込むリユリユに苦しい言い訳をする。幸いリユリユは素直な性分だ。あっさり騙されてくれた。

「うん、そう。十年前にも旅芸人が来てね……私の初恋の人、そこにいるんだ」

「え、何それ詳しく聞きたいっ」
「いいよ、あのね……」

そのときまだリュリユは幼く、店の簡単な手伝いをするのがやっとなくらしい年頃だった。旅芸人が来るということで、母にねだって連れて行ってもらったのだという。

リュリユの初恋の君は、その一座の見習いだった。帰り道、人ごみに飲まれて母とはぐれたリュリユを慰めてくれたのだそうだ。一目ぼれだった。一座は十日ほど街にとどまったが、やがて王都へ出発する日がやってきた。別れを前に泣きじゃくるリュリユに、少年は宝物にしていたという小石を渡して再会を誓った。

「それがこの石なの。後で知ったんだけど、特に何か価値のある石じゃないみたい」

リュリユはポケットから巾着を取り出して、中にある小石をみせた。サイズは親指の爪ほどだろうか。滑らかで表面は光沢を放ち、忌み色である黒の割りに禍々しさは感じない。むしろ不思議な暖かさがあった。

「うわー、きれいだね。宝石じゃなくてもアクセサリに使いたいかも」

「……にや？」

眠れなかったのか、理久も目を開けて石を見た。何か気になるのだろうか、しきりににおいを嗅ぐ振りをして『もっとよく見せる』とアピールした。

「あれ、リックも気になるの？ いいよ、ほら。見せてあげる」

理久もよく見えるよう、リュリユは商品を置く台の上に小石を載せた。目の前に置かれた石をじっと見つめ、理久はなにやら考え込

んでいる。なにやら考えがあるのだろう、理久は由梨の服を引っ張って注意を引き、耳元ですばやくささやいた。

（これ、借りられないか聞いてみてくれ）

（……どうして？）

（説明は帰ってからだ。頼んだ）

石にじやれる振り続ける理久を不思議そうに見る。これ以上はこの場で説明するつもりが無いらしい。仕方ない、ダメで元々だ。覚悟を決めて由梨はリュリュに小石を借りたい旨を告げた。

「ねえ、リュリュ。この石、アクセサリに加工したほうが持ち歩きやすいと思うんだよね。やらせてくれない？」

「え？ でもたいした価値の無い石だよ？ 加工代のこと考えるとちよつと……」

「そこは友達特権で無料ってことでいいよ。だから、ね？ 形もできただけ変えたりしないから！」

リュリュはしばらく逡巡していたが、確かにそのほうが持ち歩きやすいと判断したようだ。石を再び巾着に入れて由梨に託したのだった。

「やつぱりな。これ、ただの小石じゃないみたいだ」

夜。工房で石を検分していた理久が納得したように言いながら、机に石を置いた。光沢のある表面がランタンの灯りを受けて暖かな光を放っている。

「なに？ まさか賢者の石とか？」

「確かに賢者の石はその辺の小石と変わらない見た目だという説もあるけど……違う」

「えー、なんだ。つまんないの」

残念がる由梨を無視して、理久は再び石を手に取り、転がす。由梨はその様子がマッドサイエンティストのようだと思ったが、口は

災いの元だ。言わないで思うだけにとどめておいた。その様子には気づかず、理久は光に透かすようにして石を見つめた。

「多分だけど、石炭だ」

「石炭なの？」

「多分だ。昔見た鉱石標本にそっくりなのがあつたんだよ」

だが、と理久は続けた。

「言わないでおこう。ちょっと珍しい鉱石の一種だったってことにしておけ」

「なんで？」

石炭、つまり燃料だ。教えればこの世界の暮らしがもっと便利なものになるかもしれない。理由を問う由梨に、理久は肩をすくめて見せるだけだった。

「なんとなく、だ。言い出したからにはアクセに加工してやれよ。」

それは由梨の担当だろ」

「そだね。明日には旅芸人の興行も始まるみたいだし、せっかくだからおしゃれ用のアイテムは増やしたいでしょ」

棚からアクセサリ加工用の道具を取り出した。このサイズならペンドアントもいいが、ブレスレットも捨てがたい。もともと由梨は手芸好きだ。あつという間に作業に没頭していった。

翌日。由梨はリュリユに誘われて旅芸人の興行を見に行った。かなり大きなテントは満員だ。

胸を高鳴らせながら見た興行は本当にすばらしかった。小規模なサーカスのようなそれは、歌あり踊りあり曲芸あり。娯楽が少ないこの世界だ。こういったものがもてはやされるのが判った気がした。そして、最後の演目。この一座でも一番人気だという男性歌手が異国の歌を披露した。由梨的に言えばアラブ風の容貌の彼を見たとき、リュリユは目を大きく見開いた。

「……あのひとだ……」

「え、本当？」

「まちがいないよ。さすがに大人になつてるけど、ぜんぜん変わつてないもん！　うわあ……」

リュリュの目にうつすらと涙が浮かぶ。歌は異国の言葉だった。どういうからくりか、由梨は言葉の壁を持たない。どんな言葉も日本語に変換されて聞こえる。だからその歌が恋歌……遠くに暮らす恋人を想う歌だとすぐに理解する。そしてその事実をリュリュにこっそり教えた。

そして、舞台が終わる。リュリュと由梨は客が引けるまで待つて件の男性歌手に声をかけようと決めていた。彼はリュリュを覚えていたのだろうか。あのときの約束を、覚えてくれているだろうか。頬を赤らめながら様子を見る。やがて、客が全員はけて一座の面々が後片付けを始める。その中に男性歌手もいた。

「リュリュ、ほら声かけなよ」

「う、うん。でも……」

結局ペンダントに加工した石をぎゅっと握り締め、リュリュはデントの中をじっと窺っている。その視線の先、男性歌手の下に踊り子の女性が駆け寄った。そして……

「……あ」

リュリュたちが見ているとも知らず、キスを交わした。

二人はしばらく棒立ちになっていた。が、リュリュが笑顔になつて由梨に振り向いた。

「あーあ、やっぱり初恋って実らないんだねえ」

「リュリュ……」

「あはは、バツカみたい。……ほんとに、ね」

涙が一粒、リュリュの頬を滑り落ちる。由梨はたまらずリュリュを抱きしめ、泣き止むまでそうしていた。

「……ただいまあ……」

どこか暗澹とした気分で小屋に戻ると、理久は夕食の後片付けをしている最中だった（準備だけは由梨がした）。

「お帰り。どうだった？」

「ん、舞台はすごくよかった……」

「ふーん。湯、沸かすか？薬草茶でよければ淹れるぞ」

珍しく気遣わしげな理久の厚意に甘えることにする。自分が失恋したわけでもないが、何故かひどく悲しかった。

「この世界の歴史は地球と割と似ている。生態系だつてそんなに変わりはない。なのに、地球では古代から使われていた石炭が、こっちでは使われていたつていう記録も名残も無い」

突然の話題転換に驚く由梨の前に薬草茶が置かれた。味に少々癖があり飲みにくいそれは、我慢して飲めば疲れを取り去ってくれる。「気づいてないからじゃないの？必要ないと思ってるのか」

力なく返しながら薬草茶を口に含む。クセのある苦味が、何故か今日は心地よかった。理久は白湯を飲みながら由梨の向かいに座った。

「ま、そういうことになるな。だから石炭の有用性を広めればちょっとした産業革命が起きる可能性だつてある」

だが、と理久は続ける。

「石炭には欠点も結構多い。最たるものは大気汚染だな。それに、この世界のエネルギーは精霊と魔力に依存してる。この状況、意外と悪くないんじゃないかって思う」

この世界のエネルギーは精霊が生み出している。人間は魔力を引き換えにして精霊の力を借りる。それが魔術であり、錬金術だ。

「つまり、この世界ではエネルギーを生み出すのに資格が要るんだ。

けど、石炭は手に入れてさえしまえば子供だって火を熾せる。さらにこれをきっかけにして兵器が開発されれば、赤ん坊が人殺しだってできる」

「……あ」

もちろん、この世界にはそれゆえの特権階級エリートがあり、腐敗がある。だが、誰もがその気になれば人を殺せる理久たちの故郷とどちらがいいのかといえば、それは難しい問題になる。

「決めるのは私たちじゃない。それは百も承知だ。けど、知らなければアレはただのきれいな石だ。そっちのほうで浪漫があるだろ」
済ました顔でそう締めくくり、理久は白湯を飲み終える。

「採取に行く。カップとポットは片付けておけよ」

森の中へ消えていく相棒の影を見つめながら、由梨は先ほどの話に思いをはせた。

「ロマン、ね。理久らしくないけど……」

確かにそのほうが夢があつていい。その点においては由梨も賛成だった。

ホムンクルス誕生？

「ホムンクルスって作れないかな。」

店で売るための薬を作っている最中、ふと由梨がそんなことを言い出した。

「錬金術といえば賢者の石にホムンクルスでしょ！」

「まあ、確かにな。」

作業の手は止めないまま、ほとんど生返事と言えるトーンで理久は相槌を打つ。賢者の石にホムンクルス。某アニメーションに限らず、錬金術を扱う作品ではかなりの頻度で出てくるアイテムだ。錬金術のだいご味と言ってもいいだろう。

「ねえ、作り方と材料調べてやってみない？」

「……一応、どちらも知ってるが。やりたくないからやらない。」
薬を瓶に移し換えながらも理久は断言した。だが由梨はあきらめない。理由もなしにあきらめろというのは無茶な話だ。

「知ってるなら教えてよ。一人でやってみるからさ。」

「……材料集めも一人でやるんだな？それでよければ教えてやる。」
理久の冷たい視線もなんのその。由梨は知的好奇心で目を輝かせて続きを待った。しばらくためらった後、ようやく嫌そうに声を絞り出した。

「蒸留器に人間の精子を入れて四十日間発酵させる。それから」

「ごめんなさい。あたしが悪かったからもうそれ以上言わないで。」
要らぬ知識で大人の階段を一つのぼってしまった初夏であった。

由梨のホムンクルス発言を忘れかけた頃、事件は起きた。

「ねえ、何か音がしない？」

「……多分、倉庫だな。何か倒れたような音だが師匠は寝てるはずだよな。」

「うん。一度寝たら朝まで起きないし、じい様じゃないと思う。なんだろ。見に行こうか？」

「だな。薬品がこぼれて爆発しないとも限らん。」

ここで由梨たちの住居について少し解説しておく。住居は三つの小屋が集まっている状態で、由梨と理久の居住区と書庫を兼ねた小屋、師匠の居住区と倉庫を兼ねた小屋がある。その二つの小屋の間に石造りの家があり、地上は薬品やアクセサリを作る研究室を兼ねた工房、地下は金属加工用の炉を設置した作業場になっている。三つの建物は渡り廊下でつながれていた。

渡り廊下を通って倉庫へ。そこで確かに異変は起きていた。何かがこぼれたり倒れたりする被害はでていない。だが、ある意味それ以上ではあった。

「樽が、揺れてる？」

「っていうか、ダンスしてる感じ？ あれって、漬物用の樽だったよね。」

なんとなく入ることがためられて、わずかに開けたドアからこっそり倉庫の中を覗いてみた。確かに漬物用の樽が揺れている、というよりも踊っている。くるくる回り、ステップを踏むかのように

跳ね回っている。

「……疲れてるのかな。今日はもう寝よう。」

「現実逃避するな。私も見えている以上、高い確率で現実だ。」

「漬物の管理は理久の担当だったよね。後は任せるね。」

「逃げるな。」

逃げ出そうとする由梨の後ろ襟を捕らえ、意を決して倉庫に入る。すると機嫌よく踊っていた樽が振り返った。どうやら扉に背を向けていたらしい。どちらが前かはよくわからないが。

『あ、父ちゃんと母ちゃんや。』

「……は？」

あつけに取られる二人のそばに、樽は駆け寄る……もとい、跳ね寄る。悪い夢ではなく現実として、何故か漬物樽が動き、喋っているようだ。理久は叩き込まれた習性から由梨をかばうようにして立った。

ぬか漬けの魅力であるその味は、酵母と乳酸菌の力によるものだ。長い間使い込んだぬか床の熟成された味は、酵母や菌がぬか床で培養された結果によるもの。ある意味、ぬか床　　目の前の樽に使っているのは小麦のふすまなのでふすま床だが　　はそれ自体が生き物と言える。

『それだけやったらウチも母ちゃんに世話されるだけの、ただの静かな漬物床やったんやけどな？　父ちゃんがウチに命を吹き込んでくれたわけやつ！』

「つまり、あたしがお父さんで理久がお母さん？」

『せや。父ちゃんがウチに黄色い粉をかけたその瞬間！　ウチはこうして命をゲットしたんや！』

樽はさらに勢いよく飛び跳ねる。ドスドスと。元は酒場で議つて

もらったウイスキー樽だ。外見は大きくゴツイ。しかも中にはたっぷり野菜やらふすまやらが詰め込まれている。多分中身は数十キロではすまないだろう。

そのクセに声は愛らしい。表現するならば萌え系だろうか。そのギャップは一種の暴力だった。

襲い来る頭痛にどうにか耐えながら聞いていると、理久は樽の言葉に気になる点を見つけた。

「由梨が、何をかけたって？」

「もしかしたら、この間の大掃除！ ほら、あたしがすっかりサフランの瓶を落としちゃったじゃん。」

そういえば、そんなこともあった。由梨はきれい好きだし、理久は効率を求める。調合用の素材を大量に仕入れたときは棚の整理をかねて大掃除をするのが常だった。

そして、先日の大掃除のときに由梨はすっかりサフランをつめた瓶を落としていた。中身はほとんどこぼれなかったはずではあるが、「そのときに花粉でもついていたらってこと、か、な？」

由梨はなんとも引きつった笑みを浮かべた。

父ちゃん、である。まだ結婚してないのに。その前に彼氏すら出来たこともないのに。しかも女なのに！

「樽の子供を持った覚えは私も由梨もないが……これも一種のホムンクルスか？」

理久は何かを耐えるような顔で眉間を揉み解しながら呟いた。

そう、ホムンクルスである。人間を植物に例えたとき、ホムンクルスを作るのに必須の材料・精子は花粉になる。花粉が蒸留器代わりの樽で熟成され、やがて命を得たのだとしたら。

『せや。ウチ、ホムンクルスや。』

「あ、ありえない……。」

由梨が呆然と呟くが、現に樽は動いているし話している。ホムンクルスの定義に照らし合わせるならば樽は入れ物に過ぎず本体は中身のふすま床のはずだが、そのあたりはどうでもいい。

「問題はそのまま食って害がないかつつことだろ。師匠のつまみにもしてるし、市場でも主力商品の一つだし。」

「それはそう……かな？正直、日本なら喋る漬物なんてリコール物だよな。」

『大丈夫や。ウチは喋るだけの漬物床やで。これからも皆様のご健康をお守りします〜ってなもんや。』

「それが大問題なんだ、樽。」

気楽なのは樽一人（？）である。漬物売っている立場である以上、胡散臭い噂はごめんだ。「あの錬金術士は怪しいものを作って売っている」なんて噂が立った日には色々洒落にならない。

ただでさえ、身分詐称やらなにやらで後ろ暗い身分なのだ。これ以上のトラブル要素はどうにかして避けたいところだ。

しばらく考えて、理久は思いついたように手を叩いた。

「よし、学者馬鹿に送ろう。何か送りたいものがあるときは名義を貸してくれるって領主も言ってたろ。」

「アーロンさんに？」

「ああ。錬金術で作り出された生命体とでも言えば喜んで受け入れるだろうよ。」

『母ちゃんひどいつ！わが子売る気かいな！』

樽に言われても理久の良心はいたまない。むしろ名案だとばかりに考えを進めていく。

まずは手紙を書いたほうがいいだろう。樽が動くようになった経緯を説明して、ついでに世話の仕方書き加えたほうがいいのかもしれない。アーロンは知的好奇心が暴走しやすいが、基本的に悪人ではない。丁重に扱ってくれることだろう

理久は樽の肩……がなかったたので蓋に手を載せた。

「いいか、樽。私の故郷には『可愛い子には旅をさせよ』という格言がある。」

『なんやの、それ。』

「わが子が本当に可愛ければ、あえて試練を課して立派な人物にさせるのが親の務めという意味だ。」

もっともらしい顔をして樽を諭す。もちろん、理久は樽を子供だとは思っていない。

「私たちの知り合いで、王都で働いている男がいる。その男のもとで世間を見て立派な漬物樽になれ。それが私が親としてできる責務だ。」

『母ちゃん……。』

「王都には珍しい野菜もあるらしい。それらを漬物にしてやればいっそう立派になれるはずだ。」

樽に目があれば潤んでいるだろう。樽にとってその言葉はそのくらい説得力があるようだった。無論、厄介ごとを避ける為の方便だが。

『わかった。ウチ、頑張って世界一の漬物床になつてみせる！』

「よし。私たちは遠くから樽を応援するからな。頑張れ。」

すっかり騙された樽は意気揚々と王都に運ばれていった。

後日、アーロンから手紙が来た。どうやらあの樽は理久が推測したとおりの理由で意思を得たらしい。伝説と同じくさまざまな知識を生まれながらに持っており、アーロンの研究を手助けしているのか。

「……しかも、あの樽はアーロンに一目ぼれしたものだからラブコ

「ルに戸惑っている、か。」

読み終えた手紙をテーブルに放り投げる。漬物床は新しく作り直した。今のところ喋りだす気配は無いが、念のため普段は布で覆っている。うっかり上に瓶を落としても大丈夫だろう。

「なんていうか、よかつたのかなあ……？」

「いいんじゃないか？新しく作った漬物床もなかなかの出来栄え。アーンもいいデータベースを得た。八方丸く収まつたろ。」

「キレイゴト言ってアーンさんに押し付けただけじゃん。」

「結果オーライだ。」

すました顔で香草茶をすする理久を、由梨はじとりとにらんだ。

「そもそも、漬物樽が喋るような非常識な世界に引きずり込まれたんだ。この程度のことはフォローしてもらって当然だろ。」

「それ、絶対アーンさんの責任とか関係無いと思う。」

相棒の悪辣さのため息が漏れてしまう由梨であった。

闇市

「出かけてくる」

新月の夜。理久はそう行つて部屋を出る。その様子は採取に出かけるときとは少し違った。

髪をターバンでしっかりと隠し、薄いメッシュのような布で口から上を隠している。西にある砂漠の民のような出で立ちだ。こうすれば黒髪と黒の瞳を隠せるが、採取のときはわざわざ顔を隠す必要は無い。

怪しい。理久は何かを隠している。

「よしっ」

由梨は眠気とばしの薬を一気におおると、こっそりと後をついて行つた。

森から街へは歩いて一時間ほどかかる。橋を渡つて、小さな集落を抜けた先だ。理久が歩く速度は速い方なので、見失わないように小走りで着いていく。

不意に犬に吠え掛かれた。慌ててしりもちをついてしまう。

「わあっ！」

「……っ……、由梨。お前何してるんだ」

「え、えーつとその、尾行？」

由梨の悲鳴に気づいたらしく理久は振り向いて呆れたような声を出した。布に隠れて見えないが、きつと表情も呆れたものになっているのだろう。

ごまかし笑いをするが、何せ相手は理久だ。ごまかされてくれない。こうなったら開き直るしかないようだ。

「だって理久が何も言わないんだもん。あたしも行く！」

「ったく。お前がついてきたなんて知れたら、私が兄貴たちに殺されるような場所なんだがな」

「何それ？ そんなところあるの？」

「あるんだよ。ま、着いて来ちまったものは仕方ない。はぐれたら面倒だ、離れるなよ」

面倒くさそうに言い、理久は由梨の腕を掴んで歩き出す。先ほどよりもゆつくりとした歩調だ。横目で様子を窺うが、理久は無表情に戻っている。目的地を訪ねても無駄そうだった。

街に入ると由梨たちがいつも店を出している区画とは反対の、酒場などが立ち並ぶエリアへ。さらに酒場街も通り過ぎると道行く人の雰囲気も変わっていく。何と言うか、胡散臭い。

「ねえ、どこ行くの？」

「いいから黙って付いて来い。つーか私がいいと言うまで喋るな。後が面倒だ」

小声でそれだけ言うとは一度掴んでいた腕を放して由梨を抱き寄せる。その姿は事情を知らない者が見れば恋人同士のそれだ。道端にたむろする男たち（総じて胡散臭いし薄汚い）が口笛や冷やかすような声を上げた。

「よーお、タリク。しばらく見ないと思ったら女連れかよ。紹介しろ」

「断る。この女に手出しは無用」

いつもよりも低い、まるで少年のような声で理久は返した。口調はどこか鋭く不機嫌なようにも聞こえる。しかし男たちはそれに怯むこともなく、むしろ陽気に笑い出した。

「やっるじゃねーか。そんなナリして女捕まえるたあな！」

「ちつきしょー抜け駆けかよ！ タリクにまで負けるなんて悪夢だ

！
」

「諦める。お前、自分の顔見たことないのか？明日は晴れるらしいから、水にでも映して確認してみる」

盛り上がる男たちを無視して理久はすたすたと歩いていく。もちろん由梨の肩は抱いたままだ。

困惑して疑問が表情に出たのに気づいたのか、男たちから離れると理久は肩をすくめた。

「ここは闇市だ。市場じゃ手に入りにくい薬の材料とか採取に使う武器とか非合法の品とか、とにかくいろいろ揃う」

そういわれて辺りを見回してみると、確かに店らしきものが並んでいた。ただ、売っているもののがかなり怪しげだ。異国風のじゅうたんや乾燥させた草はいいとして……

「目を合わせるな。あの店で売ってるのは麻薬だ」

「……っ」

何か怪しい動物のミイラらしきものに、赤黒い塊。

「ありや、異国から仕入れてくる人間のミイラと内臓だ」

「~~~~~っ！　り、理久~~~~」

「『タリク』だ。逃げるなよ。奴隷商人に捕まりたいなら止めないが」

視線は前を見たまま、理久は低い声で告げる。どうやら本気で治安の悪い場所らしい。

ああ、お兄ちゃんたちごめんなさい。あたしがしっかりしなかったせいで、理久が犯罪に手を染めてしまいました。

そんな懺悔をしてしまいたくなる。

布の奥に隠された顔は目的地を見つけたようだ。由梨をさらにしっかりと抱き寄せ、耳打ちする。

「目的地だ、店に入ったら話していい」

理久が指差す先には、猫をデザイン化したような看板がつるされている。何か薬品でもかぶったのか、ドアの一部は変色したり腐食したりしていた。正直、触りたくない。

理久も同様の考えだったのだろう。足先で乱暴にドアを蹴りつけてノックの代わりにしたようだった。

「開いてるよ。はいっといで」

しわがれた老婆の声を聞き、理久はドアを足で蹴り開ける。なんだか怪しい糸が引いたような気がした。

店の雰囲気は、表以上に不気味だった。怪しい泡を立てる謎の液体、いかにも「アレ」っぽい白い粉、なにかの黒焼き……『魔女の実験室』といった表現がしつくり来る。

しかも、中にいたのは年齢不詳の老婆だ。百を越えているといわれても信じてしまいそうな雰囲気はどこか不気味だった。

「おや、久しぶりだねリク。しかも女の子を連れてくるなんて珍しいじゃないか」

「伯爵からの伝言だ。それと今月分の報告は？」

老婆のからかいは無視し、要件を済ませようとする。ベルトの後ろから羊皮紙を出して老婆の前に放った。ついでのなか、棚を見て怪しい粉が入った瓶を手にとった。

「ちよ、理久っ！ そんなのに手え出しちゃだめだよ！」

「これは塩だ。昼の市場で手に入る塩よりもこっちのほうが調合に向いてるんだよ」

粉……塩を検分して、どうやら気にいったのか老婆の前に瓶ごと置いた。さらに棚の中身を物色している。なにかの骨、黄色い粉、何かの内臓を乾かしたもの。怪しい。ひたすら怪しい。正体を知りたいが、正直怖い。

とりあえずは話題を変えてみることにした。

「ねえ、たりく、って？」

「素直に名乗って身元が割れると面倒だからな、闇市じゃ誰だって偽名を使うもんだ」

『タリク』は砂漠の民としてはポピュラーな名前だ。本名とかけているので反応もしやすい。偽名を名乗るとき、本名に近い縁のある名前のほうがいい。呼ばれて反応が遅れると、偽名である事がばれてしまう危険性がある。

「じゃあ、なんでおばあさんは理久の本名知ってるの？」

「名乗ったからな。取引相手に偽名は失礼だろ」

「それに、伯爵家の若さまから話は通っていたでの」

『につこり』というより『にたり』と言った方が正しい笑みを浮かべて老婆が言う。

「婆さんは領主に情報を売ってるんだ。私は伯爵から頼まれて手紙を届けるメッセンジャーってわけだ。」

「ついでに若さまとこにお使いを頼んだりもしてある」

「ちなみに婆さんは先々代の救世主だ。今はこうして闇に隠れて生きてるがな」

シュタインベック伯爵家はマレビトに対して同情的だ。迫害されたマレビト達を保護し、亡命させたり仕事を頼んだりしている。アイロンが由梨たちを保護した理由にもそういった背景がある。始祖がマレビトに救われたことがあるかららしい。

「婆さん。これとこれ。それから頼んでおいたアレは？」

「できてるよ。ほれ。」

老婆は手元の木箱から何かを重たそうに取り出した。手甲のようだ。腕の部分にいろいろ仕掛けが付いているために重いのだろう。

理久はそれを腕にはめて、仕掛けをいじりはじめる。たちまち手首の先あたりにスリングショットが現れた。ゴムの部分の具合を確かめると、どうやら納得したらしい。ベルトの下に隠した小袋から金貨を出した。

「これで足りるか？」

「ああ、充分だ。そんじゃ、こつちを若に届けとくれ」

老婆が机の上に出した紙片を小袋の中に入れる。取引は終了なのだろう。理久は小袋を再びベルトの下に隠した。

「そつえば、そっちの娘さんの名前を聞き忘れてたね」

「あ、あたしは由梨です」

「そうかい。ユリ、またおいで。あんたに似合いそうな武器を用意しておくよ」

「……それはつまり、『また連れてこい』って意味か……」

いつの間にか顔なじみになった男たちに絡まれる未来を予想し、理久はうんざりとした様子を隠さなかった。

それから数日後。調合の材料を切らしたために理久は再び闇市に向かうことになった。

「よお、タリク！ この間の彼女はどうした」

「うまくやってんのか？」

「……」

予想通り絡んできた男たちをかわそうとするが、今日の包囲網はやけに強固だ。抜け出そうにも隙が無い。

「お前はガキだからな。女の扱いなんぞ知らんだろ。俺たちが教えてやるから、おこれ」

「そうそう。タリクは口数が少なくていけねえや。彼女を喜ばせる話し方くらい覚えて帰れ」

「一杯だけだ。それと私は飲まないからな。飲酒は戒律で禁じられている」

「それでいいから行こうぜ。早くしねえと酒場の席が埋まっちゃう」
これだから酔っ払いはたちが悪い。ここで暴れて顔と名前が割れても厄介だ。今日持ってきた金は酒代に消えることを覚悟した。

護身用にとってきたしびれ薬を安酒に混ぜてようやく逃れるもす

でに夜明けはすぐそこ。買い物をする暇などありはしない。

先日、由梨を同行させたのは失敗だったと心底思った。

（今度闇市に行ったら振られたっぽく話しておくか……）

変身する前に森に戻らないと何かと厄介だ。家路を走りながら酔っ払いたちを心の中で呪う理久だった。

ゴーレム

「じゃ、採取に行ってきます」

「気をつけてね。あとでお夜食持っていくよ」

採取用の装備を背負い、腕には仕掛けつきの手甲。今日は満月なので湖のそばで採取だ。先に理久がにかけて採取し、由梨が夜食を持っていくのはいつもの流れだった。

「注意せえよ黒猫。夜の森にはバケモノが住まうでの」

「またそれですか、師匠。もう一年経ちますけど一度も見ただことないですよ」

バケモノが出ると脅すのは師匠の常だ。森に潜む狂気というわけでもなく、物理的に『出る』のだという。用心の為に獣避けの魔具も持っているのだそうそう危険に遭遇することもないはずなのだが、バケモノは生き物ではないので無意味なのだそうだ。

「用心はしますよ。では、行ってきます」

手甲をはめた腕をひらひらと動かし、理久は小屋を出る。その後姿を見る師匠がニタリと笑みの形を取った。

獣避けの装備といってもさほど重装備にはならない。獣が嫌うにおいの香を腰に提げた香炉で焚き、鈴を頻繁に鳴らすくらいだ。

師匠特製のこの香は、どんな化学変化が起きているのかは不明だが、とりあえず効果は抜群だ。レシピはよくある香料ばかりなので、おそらく比率がポイントなのだろうと理久は睨んでいる。

あとは森中に張り巡らせた罠に気をつければ、罠が獣たちの壁になってくれる。

本来、夜の森は獣たちの領域だ。必要以上に森の恵みは奪わない。それを絶対条件とし、身を守る道具を身につけることで由梨と理久は夜の森の一員になっていた。

武器と着ていた服を脱ぎ捨てて水に潜る。香炉も荷物側の側に置いたので獣のたぐいは来ないだろう。この森に魔物は来ない。湖を中心として天然の強力な結界が張られているのだそうだ。獣にさえ気をつけていれば危険なことはいはずだった。

そう、そのはずだったのだ。

気がついたのは由梨が先だった。調合の材料を拾いながら湖へ向かう途中、地面が揺れたような気がしたのだ。そこは由梨も地震大国日本の出身。あわてることなく相棒の様子を確かめるために歩く速度を少し上げた。

同じころ、理久は水の中にいた。その為気づくのが少し遅れたのだろう。魚の動きが不自然になったのに気づいて、ようやく水面に顔を出した。

「理久、だいじょうぶー？」

「大丈夫って、何かあったのか？なんか水の中も様子がおかしいんだが」

「大したことないけど、地震があったんだよ。お夜食とタオル持ってきたから休憩しない？」

「ん、サンキュ。そうだな。採れる分は採ったし、あとは薬草探し

にする」

タオルというよりはただの大きな布だが、理久はそれで体を大雑把に拭いて服を着た。

「あ、また髪の毛ほつといてるー」

「すぐ乾くから放っておいても同じだろ。それより夜食がほしい」

「だめだつてば。お夜食は食べてていいから、ほら、頭！ あたしが拭くからじつとしてて」

理久はチーズをかじりつつ、おとなしく頭を拭かれる。弟扱いされるが多かったせいかな理久は自身が女性であるという認識が薄い。由梨にとってはそれが我慢ならなく、こうして世話を焼くのは昔からの習性のようなものだった。

再び地面が揺れた。振動でバスケットが倒れてサンドイッチやらサラダやらが地面に落ちてしまい、そこでようやく違和感に気付いた。

「うわわっ」

「これ、地震っていうかアレだな。怪獣映画とかであるだろ。地面が揺れて……」

「あー、うんうん。それで怪獣の体で光がさえぎられたりするんだよね。今みたいに」

そう。今二人のまわりは急に月光が遮られている。ちょうど、どこかの怪獣映画のごとく。

ぎこちなく後ろを見てみると いた。

泥でできているらしい体は縦に五メートルほど。不格好な手足、粗雑な造りの頭。

ゴーレム。そんな言葉が二人の頭をよぎった。

「逃げるぞっ！」

「うんっ！」

理久は手甲をつけなおし、理久はバスケットを抱えて駆け出した。

「なにあれっ！ 魔物とかこのへん来ないはずでしょ？」

「知るか！ とりあえず走れ！」

後ろを気にしながら疾走する。途中に罠がたくさん張り巡らされているエリアがあるが、そこは慣れというものだ。避け方はすっかり覚えている。自分が引つ掛からなければ、罠はいい足止めになつてくれるはずだ。

「理久、その手甲の仕掛けでなんとかならない？」

「ならん。仕込んであるのはスリングショットと弾とナイフだけだ」

口では否定しながらも手甲からナイフを引つ張り出す。

接近戦を挑むことになるが、あんな巨体に石つぶてではたいした効果は望めない。

それに、このまま逃げ続けてもスタミナの差で負けるだろうことは予想できた。

「援護頼む。爆弾はいくつある？」

「三個しかないや。あとはしびれ薬とか眠り薬ならあるけど」

爆弾と言っても火薬は使っていない。圧縮した空気をぶつけるだけの目くらまし程度のものだ。獣を退けることはできても、怪獣に効くとは思えない。

しかし、森の中で下手に火を使えばしっぺ返しのほうが怖い。

「薬は多分無理だな。牽制しながら、洞窟の方向に逃げる」

「わかった」

地響きが近づいてくる。獣たちは異常を察したのかどこかに隠れたようだ。由梨が爆弾を用意したのを確認してゴーレムの前に躍り出た。

「ちっ、やっぱり私たちがターゲットかよ！」

乱暴に振り下ろされた腕をどうにかかわし、無意味だと予想しつつもナイフで切りつけてみる。案の定、刃に泥がついたただけだ。

「アタリだな。やっぱりこいつはゴーレムか何かだ」

命を持たないものとなれば遠慮は要らない。もっとも、遠慮していられる余裕もないが。

「理久、いくよ！」

声が聞こえると同時に伏せる。直後、爆発音と共に理久の目の前に泥の塊が落ちた。

跳ねた泥が服につく。見上げてみると、右腕が半分以上なくなっていた。

「でかした！」

快哉をあげながら、さらにゴーレムを切りつけた。ダメージにはならないだろうが牽制くらいにはなる。ゴーレムの動きはかなり鈍い。攻撃も殴りつけるだけの単調なもの。振りあがる腕に気をつければ、理久でも凌ぐくらいならどうにかなりそうだ。

そんな油断が災いしたのだろう。左腕が理久の背中を狙っているのに気づかなかった。

気持ちいいとは絶対に言えない感触が体にまとわりつき、高々と持ち上げられる。

「理久っ！」

「ちっ……由梨、爆弾はいけるか！……がっ！」

強く締め上げられたのだろう。理久の喉から苦悶の声が漏れる。爆弾を投げるべきか否か。

理久に当たったらと言う不安。だが、このままでは握りつぶされてしまう。

「あたったらごめん！」

爆弾を二つ取り出して立て続けに投げる。命中。左手首が爆発で分断される。

落ちる！そう思ったが不思議と落ちていた。

スローモーションの視界の中でゴーレムの頭に仕込まれた『もの』が見える。

（あれは……）

衝撃で思考は強制終了。背中をしたたかに打ったせいで肺から空気が押し出された。

「が……っは」

「理久っ！」

「く……るなっ。今そっちに行くから」

無理やりに空気を吸い込んで立ち上がった。

しかし、無防備になった標的を見逃すようなゴーレムではなかったらしい。

中途半端な長さの左腕を横に薙ぎ、理久を吹き飛ばす。

いくつもの衝撃。枝を折り、木にぶつかってようやく地面へと落ちる。

結構な距離を飛ばされたようだ。由梨が駆け寄ってくる音は聞こえるが、眼を開けるのが億劫だ。

運よく頭を打たずに済んだが、服が枝で破かれて露出した肌に傷ができる。息を吸っても痛みはない。おそらく肋骨は無事なのだろう。

そう、致命傷でも重傷でもない。ならば、動ける。

「ちょ、動いちやダメ！」

「動かなきゃ的になるだろ。……あー、くらくらする」

「ああもつつ！ ほら、つかまって。肩くらいなら貸すから」

無理に起きようとする理久に肩を貸す。ここから少し行けば罨がたくさんあるエリアだ。うまいこと迂回しながら洞窟を目指せば、時間を稼ぐくらいはできるだろう。

理久の顔色が悪くなっていないか注意しながら森を進んだ。

「あのゴーレムだが、誰の仕業かわかった」

「誰？」

「師匠だよ」

罨を注意深く避けながら理久がうめく。泥まみれの顔に浮かぶ苦渋は痛みゆえか忌々しさゆえか。

「ゴーレムは起動のための道具があるんだがな」

ゴーレムは魔力によって動く人形だ。動かし方にはいろいろとあるが、代表的なものだと羊皮紙を使ったものがある。

呪文を唱えて、羊皮紙を貼り付けることで動くのだ。羊皮紙にはヘブライ語で「emeth（真実）」と書かれており、頭文字を消して「meth（死）」にすれば動けなくなると言われている。

「額に石が埋まって、魔力の気配がした。ありや、師匠の魔力だ。多分、師匠流にアレンジしたんだろうな。師匠も悪魔じゃない、私たちが死なないように細工もしてあるはずだ」

「なんであんなもの……」

由梨は呆れたようなため息をつく。その顔を横目で見ながら、理久は人差し指を立てた。

「その一。私が武器を手に入れたから修行の為に練成した」

「……うーん、じいさまってそこまで面倒見良かったっけ？」

首をかしげる由梨は無視して、中指を立てる。

「その二。以前、私たちが与太話として話したゴーレムを実践してみたくなった」

「う、それはありうるかも……」

理久はさらに薬指を立てた。

「その三。単なる悪ふざけ。私はこれが一番可能性が高いと思っている」

「……だね」

二人同時に重くため息をつく。

「で、対策はありそう？」

「多分でよければ。いいか、つまり重要なのは動力源を壊すことだから……」

走りながら説明を終えると、洞窟にたどり着いた。

「準備を頼む。時間稼ぎは私がする」

「もう平気なの？」

「あんまり。薬くれ。それと、止めはお前に任せる」

「わかった。準備できたら合図するから、うまく逃げてね」

由梨はポケットから体力回復用の水薬を差し出す。理久はそれを

受け取ると一気に飲み干した。この薬、非常に苦いうえに後で強烈な眠気が襲ってくる。だが死ぬよりはマシだ。

無理やりに息を整えて洞窟から出た。遠くから音が聞こえる。森に張り巡らせている罠にかかっているはずだが、外さずにそのまま追ってきたのだろう。

大地が震える音がした。周囲の木々の断末魔が聞こえる。

足音は緩慢な足取りで、しかし確実に近づいてくる。

「ち、もう追いつかれたか！」

手甲の仕掛けを動かしてスリングショットを作った。

震える手を叱咤する。

このまままっすぐ洞窟に来られたら困る。

とにかく洞窟から引き離さなければならぬ。

「おら、こっちだデカブツ！」

足元の石を拾って弦を強く引き絞る。

発射。

石はあごの辺りに当たってそのまま埋まった。

やはり物理的な効果は薄い。それでも注意を引くには充分だったらしく、ゴーレムは標的を理久へと定めたようだった。

「そうそう、こっちだ。鬼さんこちらってな！」

一方、由梨はバスケットの中身から材料を選び、準備に取り掛かった。

動力源を破壊する。それが作戦内容だ。理久の見立てでは額に埋め込まれた石がそれだという。由梨の任務は頭部を爆破できる手段を作ることだ。

「ええっと、あんまり道具を使わないでできるものといえば……」
湖に行く前に拾った衝撃に弱い木の実に、夜食用のチーズにサンドイッチ、採取に使う細めのナイフ、夜食を包んでいた布。それだ

けだった。調合用の機材一式には頼れない。今すぐ練成しなければいけないのだ。

「威力、足りるかなあ……」

布を袋状に結んで、木の実をできるだけ詰め込む。さらにチーズとサンドイッチも押し込んでみた。

出来上がった簡易爆弾に威力を強化する為の術式を書き込めば、おそらくは頭を爆破するには充分だろう。

「……うう、理久にはいつも文句言ってるのに……」

少しためらったが、決心して指に小さく傷を創る。

流れ出た血で魔法文字を書き込むのは理久がよくやる手段だが、あまりやってほしくないと思っていた。どんな理由でも自分で自分を傷つけるのは褒められた行為ではない。

だが、理久はいつも決まって「効率を考えたらこの方が早い」と言って聞かないのだ。

「今は理久の安全優先!」

小さな痛みに顔をしかめつつ、魔法文字をつづった。流れ出る血が魔力を術式に流し込んでいく。

最良の手段がどのようなものかは判らない。ただ相棒の無事を願うだけだ。いつだって由梨の調合は土壇場のときこそ強い力を発揮する。

だから、今回も。

「理久　　っ!」

爆弾をつぶさないように持ち、洞窟の入り口から声を張り上げる。理久はそれほど離れていなかったようで、すぐに手を上げて合図した。

「手段は!」

「できた！ 早くこっちに来て！ 爆風がどのくらいか、わかんないの！」

「わかった！」

スリングショットを畳み、洞窟に向かって駆ける。その足取りはすこし不安定になっている。

そろそろスタミナが限界のようだ。

もともと理久は運動神経がスタミナも自慢できるほどにない。今までもたせたのも気力によるもの。

だからだろう、安心したのか足元にある石に気づかなかった。

「っ！」

普段ならよろけるだけで済んだのだろうが、転んでしまう。大きな隙だ。それを逃すゴーレムではない。足を高く上げて踏み潰しにかかった。

やられる！

「ダメええええっ！」

由梨が悲鳴と共に爆弾を投げた。しかし爆弾は空中分解、木の实とチーズとサンドイッチがバラバラと落ちてしまう。

「そんな……！」

「ちっ」

横に転がってゴーレムの足から逃れる。ゴーレムとしても必殺の一撃だったのだろう。勢いを殺しきれず、そのまま転倒した。

「！ しめた！」

理久は目の前にあったチーズを掴んで立ち上がる。そのまま転んだゴーレムの頭へ回り込んだ。

ゴーレムは長さの違う腕を地につけて、起き上がろうと顔を上げる。

その刹那。

理久はゴーレムの額の石にチーズを貼り付けた。

emethからmethへ。

ゴーレムを動かす魔術は上書きされて停止命令へと変わる。
起き上がりかけたゴーレムの体がどろりと融けだし、やがて全て
が泥へと還った。

「で、何か釈明はありますか師匠。内容によっては酌量もやぶさか
ではありませんが」

「なんのことじゃ、黒猫。小娘も険しい顔をしておるが」

翌朝。理久も由梨も寝不足で不調だったが、糾弾が先だろうと意
見は一致した。動力源となった石を観察すると、やはり石に書き込
まれた文字は師匠の筆跡だったのだ。

「逃げようだったってダメですからね、じいさま。ほら、証拠だつて
あるんだから」

テーブルの上に証拠の石を放り出す。師匠はその石を手にとると
……なにやら呪文を唱え、塵へと変えた。

「ああっ！」

「ちょ、じいさま！ それはないでしょ！」

「ほっほっほ。しかしアレを倒すとは成長したのお。今度はもっと
強いゴーレムを作るとしよう」

弟子の成長を喜ぶというよりは、完全に愉快犯の笑みだ。

これで刑は確定だ。

「由梨、師匠が反省するまで……」

「わかってる。じいさま、酒蔵の鍵はあたしが預かります。反省文

書いてくるまでお酒一滴だつてゆるしませんからね」

「んな……！」

その後、師匠は反省文と共にいくつかの研究書を由梨たちに譲ることを約束し、ようやく飲酒を許された。さらにこの件をもう一人の弟子アーロンに愚痴るも、「それは師匠が悪い」と一刀両断にされた。

しかし、それでも師匠の悪戯癖は直らなかつたことを書き加えておく。

ゴーレム（後書き）

作中に出てくる爆弾は、アリエシリーズのクフトとかその辺を想定しています。

この世界、火薬はありませんので。

最終回・ある学校の授業風景

はい、着席ー。今回はどこからだったか……ああ、技術革新からだね。

じゃあまずは予習してるかどうかテスト。技術革新のきっかけとなったのはどこ？　んー、アドリオンさん。

「リユース王国の西部ー」

正解。厳密に言えば西部のトラウモント地方とシュタインベック地方ね。ちなみに先生の実家もそこにあります。あ、ここはテストに出さないからね。

トラウモント地方とシュタインベック地方は隣り合ってるから、多分その境界あたりで始まったんじゃないかと言われてるけど、まだ詳細は分かっていないんだよね。そこらへんの資料を管理している王国とシュタインベック財団が歴史に関する資料に閲覧制限をかけてるの。

「えー、それなんか怪しい二オイしねー？」

バルマーくん、先生には形だけでも敬語使おうねー。

制限の理由は当時の領主テオドル・エーベルハルトの遺言によるものが大きいんだって。あ、あとこっちはテストに出ないけど実は王国的にちょっとまずい事情もあるらしいよ。

「あれ、先生の苗字と一緒にだ」

そうよー。先生も世が世ならお姫様……もちろん嘘だよ。わたしはテオドールの弟の方の子孫だから。まあ、他の人よりは財団の書庫に入る手続きが楽なんだけどね。この時代の研究者になったのもそこらへんが理由の一部だったりして。

「へえー」

あ、今のはもちろんテストに出さないよー。

さて、この時期に開発されたもので有名なのは計量の単位に洗剤、羊皮紙から植物性の紙にシフトしたのもこのへんだね。チヨークの発明もこのころ。あと、教科書にはあまり載らないけどスキップジャックの燻製とかラミナリアでスープを作る技術ができたのもこの時期。

「でも先生ースキップジャックもラミナリアも海産物でしょ。あのへんって海ないですよー？」

そこが面白いところなのよね。これはトンデモ学説の一つなんだけど、技術革新をもたらしたのはマレビトって言われてるのよ。

「マレビトって、あの迷信に出てくる？」

そう、そのマレビト。暗黒時代が暗黒時代たりうる理由はそこなんだよね。どこからか人を誘拐しては自分の都合のいいように使役していたって。それは外国とも言われているし、いつそこの世界の外からとも言われているのはこの間教えたよね。

技術革新をもたらしたマレビトは異世界から来た……みたいな伝承がシュタインベック地方に残っているの。ここらへんは知りたければ大学院まで進んでゼミに入りなさい。私と姉がみつちりしごいてあげるから。

「げえー」

はい、思っても悲鳴は出さない！ 本音と建前は使い分けなきゃうまく生きていけないわよ！。

マレビトかどうかはともかく、技術革新はある錬金術士の登場ぬきに語れない……と言いたいところだけど語るに語れないのが現状でもあるんだよね。民話と技術書以外に記録が残されていないの。だからマレビトだったんじゃないかなんて言われているんだけど。

一応、有力な説が無いこともないんだよ？ ほら、みんな一度は課題図書で読んだことあるでしょ。「リカルド・ヴィンターの書簡」っての。

「貴族のお嬢様と謎の男の文通記録でしたっけー」

そう。使われている文法がきれいだから、上手に手紙を書くためのひな型にも使われているアレ。ちょっと意外な話んだけど、リカルド・ヴィンターっていう人間がいた記録はそれしかないの。そこ

から読み取れる情報も限られてて、シユタインベック地方に住んだこと、黒髪だったこと、背が高かったこと、なぜか夜にしか動けない体質だったこと……そのくらい。

そのリカルド・ヴィンターにはユーリっていう同居人がいて、この二人の錬金術士が技術革新の要だったと言われてるわね。……ユーリ、に関しても記録らしい記録がほとんど残ってないんだけどね。

「ないないづくしじゃーん」

だから研究が面白いんじゃない。わかってないね、カーフェンくん。先生の仮説もないことはないんだけど、まあ研究自体が未だに制限されているからねー。発表できるかどうか。

……っと、そろそろ授業時間終わるね。

それじゃ、今回の課題は「リカルド・ヴィンターの書簡」を読んで自分の考察をレポートで提出すること。ただの感想文とかあらずじ解説だったりしたら容赦なく再提出だからねー。

はい、授業おしまいー。

最終回・ある学校の授業風景（後書き）

ありがとうございました！ よかったら他の小説もひいきにしてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3956t/>

錬金術士と使い魔な猫

2011年9月6日03時14分発行